

ガンダムビルドダイ バースRe:Birth

ドラッグEX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GBN―《ガンプラバトル・ネクサスオンライン》。

後に全世界を魅了することとなるネットワークゲームの黎明期。

参加者の増加と共に拡大する電脳世界を飛び回る一人の青年がいた。

青年の名はヒイラギ・シヨウマ。

特定の集団に所属することなく、GBN内のミッシヨンの助っ人《ヘルパー》として活動する彼は、その腕をダイバーたちから称賛され、信頼を集めていた。

だが一方で、彼に關してはある噂が流れていた。

シヨウマのガンプラには、少女の霊が憑りついている―。

これは、人々の夢と業が渦巻く電脳世界を駆け抜けた、戦いと青春の記録。

目次

第1話	魂の宿るガンブラ	1
第2話	魂を失くした少女	17
第3話	GBジャーナル	25
第4話	めぐりあう夜	36
第5話	再会、少年よ	45
第6話	《神》待つ宇宙へ	51
第7話	限定ミッション	62
第8話	悪意の翼	75
第9話	邂逅する禁忌	88
第10話	大気圏の決着	104
第11話	戦士の報酬	117
第12話	棄てられた翼	130

第13話	思いだけでも	143
第14話	GBNに光る兄弟愛	152
第15話	砂の海を征く者たち	168
第16話	ソレが彼女のやり方	183
第17話	ユークと牛	194
第18話	桃色の衝撃	202
第19話	暴かれる光	213
第20話	光、追いかけて	225
第21話	掴め尻尾	232

第1話 魂の宿るガンブラ

曇天の空の下に広がる、廃墟の街。

人どころか生命の気配すら感じられない朽ちたビル群で突如として爆発が起こり、一拍遅れて煙が吹き上がる。

「う、うわあああつ!!」

「助けてええつ!!」

煙の中を突き破って出てきたのは、赤く塗装された《ガンダム4号機》と青く塗装された《ガンダム5号機》。

本来とはあべこべのカラーリングのガンダムたちを追うのは、半球状の頭部に巨大な一つ目を光らせる《デスアーミー》軍団。

その数、1000機。

ここは未来世紀の新宿……を模したミッションステージ。

GBN——《ガンプラバトル・ネクサスオンライン》が稼働を開始して数ヶ月。

『ダイバー』と呼ばれるプレイヤーを徐々に増やし始めたこのゲームでは、同時に初心者の数も増えていった。

となれば、設けられたミッションをなかなかクリアできないダイバーも現れてくるのは自明の理である。

「いやいやいやいや！ あんな無理だろおおおおつ!?!」

「だから言ったら！ やめようってさあああああつ!?!」

廃墟の街を逃げるように飛ぶ2機の《ガンダム》は、そんな初心者卒業手前の新米ダイバーたちが操縦している。

それを容赦なく追い詰める1000機の《デスアーミー》は、《ガンダム》を袋小路に押し込んだ。

逃げ場を失った新米ダイバーが操縦桿から手を離して悲鳴をあげる。

「も、もうダメだああ〜！」

『はいはい、二人とも落ち着いて』

悲鳴を止めるように通信が入った。

《デスアーミー》の軍団は新手の登場に気づいて空を見上げる。

1000の眼に映ったのは、崩れかけのビルの屋上からこちらを見下ろす一つの機

影。

『そんな情けない声出すなって。ゲームなんだ。どんな時も楽しめばいいんだよ』

そう言つて《ガンダム》と《デスアーミー》の間に降り立ったのは、もう一体の《ガンダム》。

しかし、その《ガンダム》は『ファースト』や『Gガンダム』のものではない。

『鉄血のオルフェンズ』に登場した、《ガンダム・キマリスヴィダール》をベースに作られた改造ガンプラだ。

白を基本色にして、右肩だけが深い青色に塗装されている。

新米パイロットたちの《ガンダム》のレーダーに、友軍反応と共にその機体名が表示される。

《ガンダム・キマリスクインス》。それが、シヨウマのガンブラの名前であった。

「へ、ヘルパー……!」

そして新米ダイバーたちが呼んだその名は、《クインス》を駆るダイバー、シヨウマの通り名である。

『よく見てろ』

《クインス》が再び上昇し、手にしたドリルランス内蔵のマシガンで一機のデスアーミーの頭部を撃ち潰す。

それをきっかけにデスアーミーたちの一斉射が始まるが、白い機体は舞うように回避していく。

軽やかな跳躍。柔らかな着地。

しなやか且つ鮮やかな攻撃。

挙動の一つ一つが、まるで本物の人間のような滑らかさを有していた。

「す、すげえ……」

「あれがベテランの動きか……」

呆けた声をあげる新米ダイバーたちに、シヨウマは落ち着いた口調で語りかける。

『このミツシヨンの難易度がノーマルだつてことも考えるんだ。一機一機はそう強いわけじゃない。二人のガンプラの武装だつて相性はいいはずだ。信じてやれよ。自分と、自分の作ったガンプラを』

シヨウマの言葉を受けて、二人は自分たちがガンプラと過ごした時を思い出し、そして奮起した。

「よ、よし！ やってやるぞー！」

「俺たちだって、いつまでも初心者じゃないんだ！」

闘志をみなぎらせた二機のガンダムを横目に、シヨウマは地上を埋め尽くさんばかりのデスアーミーに意識を向ける。

「さあて、俺たちも負けてられないな！」

ハイパー・ビームライフルが閃光を放ち、ジャイアント・ガトリングが火を噴く。

だが、戦場で最も激しく動いたのは、悪魔キマリスの名を冠する白い騎士のようなガンブラだった。



「助かったよ、ヘルパー。あんたを雇って正解だった」

「正直なところ、俺は疑ってたんだ。初心者狩りの亜種かなんかだと。でも謝るよ。君の腕は本物だ」

静かになった新宿ステージで、三機の《ガンダム》が向かい合うように立つ。

その足元では、互いに姿を現したダイバーたちが集っていた。

「いや、二人もよく頑張ってくれた。大活躍だったじゃないか」

にこやかに賞賛する紅い髪青年——シヨウマ。しかし新米ダイバー二人は苦笑で返す。

「そう言われても、機体の損傷度を見たら、なあ？」

「ああ。俺らはボロボロ。あんたは無傷。すっかりおんぶに抱っこだったよ」

二人の言う通り、《4号機》は頭部と右腕を失い、《5号機》は両腕が肩口から無くなっていたが、《クインス》は白い機体に傷ひとつなかった。

「ははは……。でも俺は手伝っただけだよ。この成功は二人のものだ」

「嬉し恥ずかしなこと言ってくれなせ。あ、そうだ。これ、今回の報酬な」

GBN内の仮想通貨であるビルドコイン（BC）が1500BC、《4号機》のパイロットをしていた方のダイバーからシヨウマのアカウントに送られる。

「毎度どうも。それじゃあ最後に……」

シヨウマは拳を突き出して、二人に尋ねた。

「GBNは、楽しいか？」

「……ああ!!」

二人もシヨウマの拳に自分たちの拳を合わせた。



(やー、噂通りの凄腕だったな。ヘルパーのやつ)

(シツ、気づかれるぞ)

ミツシヨンが完了したダイバーは通常、各サーバーに設けられたエリアへと帰還する。

しかしシヨウマに助けられた新米ダイバー二人は、いまだ未来世紀の新宿から退去せず、瓦礫の陰に身を潜めていた。

もう一つの噂を、確かめるためだ。

(なあ、気が引けないか？ あんないいやつなのに、こんなことするのは悪いって)

《5号機》を操縦していたダイバーが言うも、《4号機》のダイバーは気にしない。

(でも、せつかくなら見てみたいだろ。ほら、始まる始まる！)

彼が指差した先には、《クインス》に手を触れさせるシヨウマの姿が。

「おつかれ。これで今日の依頼は全部完了だ」

親しげに話しかけている。だが、その相手は自身のガンブラ。

ここまではガンブラに真に愛情を注いでいる者の多いGBNならばそう珍しい光景ではない。

『うん！ おつかれさま！』

だが、二人は確かに聞いた。シヨウマの声とは違う、《クインス》から発せられている少女の声を。

「やっぱり休みの日は大変だな。依頼が平日の倍はある」

『とか何とか言つて、ここ何日か、朝からずっと働き通しじゃない。無理してない?』

「え? ははは、大丈夫だよ。無理なんかしてない」

シヨウマは笑いながら、《クインス》の足に触れる。

「俺はお前のためならいくらでも頑張れる。だから、お前は何も心配しなくていい。お前こそ、具合が悪かったらちやんと見えよ? 大事な身体なんだから」

瓦礫の陰にいたダイバー二人は、興奮気味に囁き合った。

(……ひゃあ〜! マジだ! マジでガンプラと話してやがる!)

(こっちの噂も本当だったんだな！ こええー……！)

(もう充分だろ？ い、行こうぜ！)

(そうだな。くわばらくわばら！)

新米ダイバー二人は顔を見合わせてからいそいそとエリアを離れた。

「……行ったか」

『行ったね』

心配が無くなったのを察知して、シヨウマは短く息を吐いた。

「まったく、気づいてないと思ってるのか？ いい気なもんだよ。何も知らないで」

『まあまあ。ある程度なら知られても問題ないって、先生も言ってたじゃない。それに私はシヨウマとこうやって話ができるから、悪い気はしないよ』

その声に、《クインス》に添えていたシヨウマの手がわずかに強張る。

「……そうだな。今に始まったことじゃないか。この後はどうする？　ペリシアにジオリマでも見に行くか？」

『いいね！　シャフリヤールの新作が見れるかも！　でも、その前に先生に報告。きつと待ってるよ』

「おっと、いけね。忘れてた」

『いやいや、忘れないでよ。私にとつてもシヨウマにとつても大事なことなんだから』

「ごめん。それじゃあ一度ログアウトする。終わったらまた戻ってくるから、それまで休んでてくれ」

『うん。わかった。気をつけて来てね。リアルリアルの私私にもよろしく』

そして、シヨウマはGBNからログアウトした。



「ん……」

シヨウマはGBNからログアウトすれば、凰修大学2年生の柊ヒイラギシヨウマ翔真としての現実へ帰ってくる。

GBN内のアバターと瓜二つの青年。違いといえば髪の色が紅いか黒いか程度だ。

凝り固まった背中を伸ばして椅子から立ち、締め切っていたカーテンを開けると、傾いた日差しが網膜を刺激する。

「……………」

シヨウマは机の上に置かれた写真立てを手に取った。

そこに入っているのは、病室で硬く目を閉ざして眠る一人の少女の写真。

「待ってろよ……。必ず助けるからな。カリン」

写真立ての横に置かれた、GBNにログインするために使うダイバーギアの上には、HGサイズの《クインズ》が立っていた。

第2話 魂を失くした少女

夕日に染め上げられる街を走る一台のバイク。ハンドルを握っているのはシヨウマだ。

最近になって開発が始まった沿岸都市に住むシヨウマは、これから向かう場所に行く際は必ずこの道を通る。

赤信号でバイクを止め、ヘルメットのバイザー越しに工事現場を見やる。一際目立つ位置に、その内側に立つものを隠すようにしてシートが張られていた。

「……実物大のエアーストライクか。もうできてるのかな」

なんとはなしに眩くと、信号が青に変わった。

やがてシヨウマは目的地である鳳修大学附属病院に到着した。

いつも利用している関係者用の駐車場にバイクを停めて、建物に入ると、顔なじみの看護師が受付に立っていた。

「あら、柗くん。こんにちは」

「どうも。先生は？」

「いつもの所にいると思うわ」

短くも充分なやりとりを終え、シヨウマは病院内の一室へと足を運ぶ。

資料保管室という札が掲げられたところが、これから会う人物の根城だ。

「失礼します」

扉を開けると、椅子に腰かけ、こちらに背を向ける一人の若い男がいた。

「麻玖木先生」

呼びかけると、その男は振り返ってシヨウマに微笑んだ。

「やあ、シヨウマくん。そろそろ来ると思っていたよ」

麻玖木ハルト。

この病院に勤務する脳外科医で、その容姿も相まって病院内の女性たちからの評判も高い。

そして、ある取引をしてシヨウマの人生を変えた男だ。

「これ、今週分の活動記録です」

「ありがとう。いつも助かるよ」

シヨウマから受け取ったUSBメモリーを机の上のパソコンに挿し、麻玖木はデータの閲覧を始める。

「彼女の調子はどうだい」

「特に問題はないです。働き過ぎじゃないかって、俺の方が心配されました」

「フツ、惚気話だな。しかし、本当に今週の分は多いな。いつもの倍はある」

シヨウマが渡したUSBには、《ヘルパー》としての彼の活動記録が、曜日ごとに分類されて入っていた。

「これは、近々開催される期間限定ミッションの参加条件が、Cランク以上のダイバーであることも関係しているのかな？」

「かもですね。今週はほとんどが昇級絡みの依頼でした。みんなそんなにやりたいんで

しょうか。10機の《ディビニダド》攻略戦」

「あの場面はインパクトがある。それに、撃墜報酬も欲しいのだろうさ」

二人の会話はGBNに関するもの。麻玖木もGBNのダイバーの一人であった。

「先生も出るんですか？　もしかしてついに先生のガンブラが見れるとか!？」

シヨウマの声が弾む。シヨウマはまだ麻玖木のガンブラを見たことがなかったのだ。

しかし、麻玖木は眉を下げて苦笑した。

「生憎、イベント期間中は仕事を立て込んでしまっただけ。すまないが、今回は不参加とさせていただきますよ」

「なんだ、残念。先生のガンブラ、カリンも楽しみにしてるのに」

「そうか。……さて、記録の確認は後でもできる。彼女に会っていくかい？」

その言葉に、シヨウマの表情が一変して陰る。

「……はい。会わせてください」

二人は部屋を出て、ある病室へ足を運んだ。

麻玖木によって確保されているこの病室には、一人の少女が眠っている。

「カリン……」

ベッドの上の表札に記された名前は、アワクラカリン淡倉花梨。

「バイタルに問題はない。脈拍も脳波も正常値だ。ただ、植物状態が依然として続いてる」

「そうですか……」

事実を述べる若い医者の声に、シヨウマは目を伏せる。

「すまない。私も出来る限りのことはしているつもりだが……」

「やめてください！ 先生には俺もカリンもずっと世話になりっぱなしです！ 先生がいなかったら、カリンは……。だから、先生は悪くありません！」

「そう言ってくれると、いくらか気持ちが悪くなるよ」

「俺、頑張りますから。GBNでカリンと一緒に《クインズ》をもっと動かして、データを取って。だから、こっちのカリンのこと、よろしくお願いします！」

「ああ。全力を尽くすよ」

そしてシヨウマは短い滞在を終え、帰路についた。

病院の廊下からそれを見送った麻玖木は、シヨウマの乗るバイクが角を曲がって見えなくなるまで、その視線を遠くに投げた。

「……柊翔真、淡倉花梨。君たちは私の希望だよ」

第3話 GBジャーナル

ペリシア・エリア。

ガン普拉ビルダーにとっては聖地とも呼べる、自らの作ったガンプラやジオラマを展示するために作られたGBN屈指の人気エリア。

麻玖木への報告から帰宅したシヨウマは、再びGBNにログインし、《クインス》を駆つてこのエリアを訪れていた。

「どうだ。見えてるか？」

『わあ〜っ！ すっごくいい！』

シヨウマは自分の肩の上に開いたデイスプレイに映る《クインス》に、《▽ガンダム》と《ターンX》の最終決戦を題材としたジオラマを見せていた。

『見てよシヨウマ！ あの▽の作り込み！ デイティールもすごいけど、胸に刺さったビームサーベルまでちゃんと再現してる！ あれプラ板じゃないよ！ 何で作ったんだろう！』

「ああ。すごいな。それにあの《月光蝶》の繭の糸、どうやって再現したんだろうな」

《クインス》の映る画面から発せられる、少女の弾む声に、シヨウマも応える。

ペリシアは中立地帯であり、中東の街を模した空間にガンプラを持ち込むことはできない。シヨウマもその例には漏れていなかった。

しかし、使用するためのガンプラは持ち込めなくとも、待機させているガンプラはディスプレイ越しならば問題なく表示することはできるのである。

『シャフリヤールの新作が見れなかったのは残念だけど、完成度の高いジオラマが見れるのはいいことだよね！』

通路を進みながら、《クインス》は楽しそうな声をあげる。シヨウマも笑顔のまま、その言葉に応えていた。

「俺だって、その気になればジオラマの一つや二つ作れるさ」

『え〜？ もっぱらガンπρα作りしかしないシヨウマが？ どうだかなあ』

「疑ってるのかよ？ 俺にかかれば震える山の《グフカスタム》とか朝飯前だぞ」

『あははっ、シヨウマは見栄の張り方のベクトルが面白いね！』

「おいおい……ん？」

『どうしたの？』

「いや、依頼が来たんだ」

『依頼？ ヘルパーの？』

シヨウマは個人用のチャットの他に、依頼用のチャットを開設している。そこに新たな依頼が舞い込んできたのだ。

「なにになに……。『急遽Bランクに上がる必要ができてしまったため、昇級ミッションの経るプをお願いします。総合受付前でお待ちしてmasu』……。なんか変換を間違えてるな」

『慌ててたのかな。どうするの？』

「んー……。今日はもう店じまいだしなあ」

時間はまもなく日付を跨ぐ頃。ログインしているのは相当なレベルでGBNにのめり込んでるダイバーばかりだ。こんな時間帯に昇級ミッションの依頼を申し込んでくるのはシヨウマにとっては気乗りがしなかった。

『でも、別にシヨウマがログアウトしてたわけでもないし。タイミングもいいんだから、話だけでも聞いてあげたら?』

「……そうだな。無視するのも寝覚めが悪い。行ってみるか」

シヨウマは《クインス》の声に頷き、ペリシア・エリアを後にした。

GBN中央受付広場。

日中の時間帯ならば多くのダイバーがいるこの空間も、深夜帯となるとそれもまばらだ。

「さて、依頼主はと……」

受付前にやって来たシヨウマは首を巡らして依頼主を探す。

「あなたが《ヘルパー》のシヨウマ？」

背後から声が飛んだ。振り返ると、金色の髪を高い位置で結んだ女性ダイバーがいた。

「そうですけど、あんたが依頼主か？」

「すぐ来てくれるのね。嬉しいわ。私はこういう者よ」

送信されたフレンドコードには、そのダイバーの肩書きが記されていた。

「GBジャーナル記者、ユーコ……？」

「そ！ あなたも知ってるでしょ？ GBジャーナルのこと」

ユーコと称されるダイバーは、表示したディスプレイにGBジャーナルのホームページを映し出した。

「そりや、まあ。おたくらが投稿するおすすめミッションの記事を当てにして、依頼を寄越すダイバーもいるくらいだし」

GBジャーナルはGBNが公認するプロモーションとダイバーのサポートを兼ねた特設の情報サイトである。

シヨウマの前に立つユーコというダイバーは、そのGBジャーナルのエース記者であつた。

「で？ そのGBジャーナルの記者さんがなんでまた？ Bランクへの昇級なら、そんな急ぐこともないと思うんだけど」

GBNの大半のミッションはCランク以上であれば参加できる。そこから先はほぼ趣味の域の話だ。

「ふっふっふ、実はね、昇級ミッションの話はウソなのよ」

「は？」

「あなたの噂は聞いてるわ！ あなたのガンブラについて、ぜひ話を聞きたくて！」

鼻息荒く詰め寄ってくるユーコに、シヨウマは大体の事情を察した。

「ヘルパーのあなたに依頼するわ！ 取材に応じて！ あなたはうちでもかなり注目されてるのー！」

「あー……」

間延びした声を漏らしたシヨウマが取った行動は、回れ右。そしてダツシユ。

「ちよ、ちよつと!! どこ行くのよー！」

「受けるのはミッションのヘルプだ！」

「依頼は必ず引き受けるんじゃないの?!」

「取材とかそういうのは依頼の対象外! 悪いけど、話せることはない!」

「ま、待つてよ! あなたに会うために、ずっと待つてたんだから!」

「知らないよそんなこと!」

中央受付からログアウトするためのゲートはいくらか距離があり、そこからでしかログアウトできない。シヨウマは仮想空間で全力疾走を試みた。

「クソツ! 騙された! やることがコスいなGBジャーナル!」

悪態をつきながら走るシヨウマ。ゲートまであと少し。

しかし。

「ま、待ってください！」

「どわっ!!」

何者かに腕を掴まれ、急ブレーキがかかったシヨウマはその場で尻餅をついた。

「痛てて……!!　おい！　危ないだろ！」

「すつ、すみませんっ！　でも、あの、へ、ヘルパーのシヨウマさんですよね!!」

中性的な顔つきの小柄なダイバー。色白で、頭には鳥の翼のようなアクセサリーをつけている少年だった。

「そうだけど、君は？」

少年ダイバーは目を左右に泳がせ、意を決したようにシヨウマに言い放った。

「セレジユです！ み、ミッションヘルプの依頼をしたくて！」

第4話 めぐりあう夜

「依頼って、いきなりそんなこと言われても、今ちよつと取り込み中で……」

GBジャーナルの記者のユーコから逃げていたシヨウマを引き留めた少年ダイバーのセレジュは、座り込んだままのシヨウマに深々と頭を下げた。

「おつ、お願いします！ 僕、どうしてもクリアしたい……いや、しなきゃいけないミッションがあつて、でも、一人じゃ難しく……！ ヘルパーさんの話を聞いて、それで、ログインしつづつと待つて……」

「おいおい、勝手に話を進められても——」

「追いついたわよー！」

ほんのわずかな会話のうちに、ユーコはシヨウマとの距離を詰めていた。

「さあ、観念して取材を……って、誰？ その子」

「知らないよ。いきなり引き留めて依頼をしたいとか言ってきたんだ」

立ち上がったショウマの言葉を聞いて、ユーコは身をかがめてセレジュと視線を合わせた。

「ごめんね、ぼく。実はこのお兄さん、私が先に依頼を頼んであるの」

「そ、そうなんですか？」

「こいつが勝手に言ってるだけだって！」

「じ、じゃあ僕の依頼が先に受けてもらえるってことですね！」

「あら、意外とガッツあるわね……ん？」

少年ダイバーの思わぬカウンターにたじろぐユーク。しかし、すぐにある事を閃いた。

「そうだ！ ぼく、いいわよ。君の依頼、このお兄さんに引き受けさせてあげる！」

「本当ですか!!」

「おい！ 何を勝手に……!!」

「いい？ あなたはこの子の依頼をこなす。私はその様子を密着取材する！ ほら、これなら問題ないでしょ？」

「俺の意思が無視されてるんだが！」

「あなたさつき自分で言ってたじゃない。ミッションのヘルプは受けるって」

「う……………」

痛いところを突かれた。ユーコは先ほどの会話の内容をしっかりと覚えている。無論、シヨウマ自身も。

「そんな揚げ足を……………！ 子どもをダシにして、そこまでやるか普通！」

「あら、絹江・クロスロードもこれくらいの食欲があつたわよ？」

「そのせいでサーシエスに消されたんだろ！」

「なによ、煮え切らないわね。どうしてダメなのよ」

「どうしてって、あのかな——！」

『私はいいと思うよ？』

「かつ!!」

「か?」

「あ、ゲフンゲフン……。ちよつと失礼」

二人に背を向けたシヨウマは、最小表示のディスプレイの中の《クインス》を睨みつけた。

「おい、どういうつもりだよ……!　こんな人前で声なんて出したら……」

『だって、あの女の人はともかく、男の子の方は困ってるんでしょ?　シヨウマはヘルパーなんだから、助けてあげなよ』

「そんなこと言ったって……」

シヨウマはもう一度ユーコとセレジユの方へ振り向いた。ユーコは挑発するように

肩をすくめて見せ、セレジユは不安そうにシヨウマの返事を待ち続けている。

運営公認の情報サイトを無下にあしらうことのデメリット、幼気な少年ダイバーの依頼を突っぱねることへのヘルパーとしてのプライド、そして自らの抱える秘密。

様々な言葉が数秒の間に頭を駆け巡り、シヨウマは一つの結論にたどり着いた。

「わかったよ！ 受けるよ！ ただし、ちゃんと報酬はもらうからな！ それから、変に探るような真似もしないでくれ！ あくまでヘルパー活動の取材つてことで！」

それぞれ指差し確認のようにして言われ、その内容を理解した二人の表情が華やかだ。

「ありがとうございます！」

「ふふふつ、そうこなくつちや！」

「よくわからないけど、お姉さんもありがとうございます！」

頭の羽根をパタパタと動かしながら言うセレジユに、ユーコは余裕たつぷりに微笑む。

「気にしないで。私のことはユーコでいいわよ」

「はい！ ユーコさん！ それから、えっと……」

セレジユの視線に、シヨウマは観念して答える。

「……好きに呼べよ」

「はいっ、シヨウマさん！」

セレジユの笑顔に頷いたシヨウマは、小さくつぶやく。

「これでいいんだな？」

『うん、ばっちり！』

《クインス》の返事に苦笑し、シヨウマはこれ以上の追究を避けるべく、話を依頼にシフトした。

「で、セレジユだっけ？ どんなミッションを手伝えばいい？」

「あ、それ私も気になる！」

「は、はい。その……。これ、なんですけど」

遠慮がちにセレジユが表示したディスプレイを、シヨウマとユーコが覗き込む。

そこに映っていたのは、木星帝国の総帥クラックス・ドウガチが搭乗した、『神』の名を冠する巨大モビルアーマー。

「僕と一緒に、今度の10機の《デイビニダド》攻略戦に参加してください！」

第5話 再会、少年よ

「ほう、GBジャーナルの取材か」

凰修大学附属病院の資料室。

セレジユの依頼を引き受けた翌日、シヨウマは事の顛末を報告するために再び麻玖木のもとを訪れていた。

「すみません。断り切れなくて……」

しおらしくなって謝るシヨウマに、麻玖木は柔らかな表情を向けている。

「謝ることはない。上手くいけば君の活動のいい宣伝になる。それに、彼女が望んだことなのだろう?」

「ええ。まあ」

「ならば、なおさら引き受けてよかったじゃないか。彼女もやる気なら、良いデータが取れるかもしれない」

「先生がそう言うなら……」

「私としては、依頼主の少年ダイバーの方も気になるな。自力でCランクに上がっているにもかかわらず、君に依頼を出すとは」

シヨウマは基本的に依頼主のことは他人には話さないが、自身が信頼を寄せる麻玖木は別であった。何を隠そう、シヨウマにヘルパーとしての活動を提案したのは麻玖木なのだ。

「俺も妙だと思っただけです。一応の依頼書を書いた時にランクを確認して、本当に俺が必要なのか聞いたんですけど、どうしてもって押し切られて。依頼書出したらずぐログアウトしたし」

昨夜のセレジユとの別れ際を思い出し、シヨウマは小さな不審感を募らせる。

「あまり疑いたくはないですけど、妙な噂も流れていますし」

「噂？ ブレイクデカルルことか？」

「あ、先生も知ってました？」

「GBN内でガンプラの性能を格段に引き上げる違法改造パーツ……。まだ眉唾の域を出ないが、事実ならば度し難いな。自らの力で強くなることを放棄するなど」

「手っ取り早く強くなりたい初心者ダイバーもいなくはないですからね。そういう手合いは依頼を受けてもちよつと厄介ですよ。操縦が難しいとか、武器が弱いとか。自分のガンプラなのに文句ばかりで……。つと。すみません、愚痴っぽくなっちゃいました。そろそろ俺、行きますね」

「いや、気にすることはない。今日は会っていかなくていいのかい？」

「こつちに来る前に顔は見てきました」

「そうか。では、受付まで送ろう。なに、私もこれから診察だ」

そうして二人は資料室を出て、受付へと繋がる通路を歩く。会話の内容はもちろんGNだ。

「しかし《デイビニダド》か……。対策は考えているのかね？」

《クインス》はガンダムフレームですし、ビームは何とかなるはずです。あの巨体も、威圧感はあるのも的が大きいと考えられます。問題は核ミサイルとフェザーファンネルですね」

「確かに、大規模ミッションで参加ダイバーが多いとはいえ、乱戦になれば厄介だな」

「そこが怖いですよ。撃墜者限定報酬の称号と150万BCはターゲットと同じで10人にしか与えられない。争奪戦になりま……うおっ！」

「わあっ！」

通路の曲がり角で、シヨウマの身体が大きく揺らいだ。そして、シヨウマ自身でも麻玖木のものでもない声がひとつ上がる。

「いたた……ご、ごめんなさいっ！」

シヨウマとぶつかった学生服の小柄な少年は、尻餅をついている。

「いや、こつちこそ。怪我はないか？」

シヨウマが差し伸べた手を掴もうとした少年は、シヨウマの顔を見て、ぎよつとした。

「えっ……？」

そこで、シヨウマも思い至る。この光景に、デジャヴを感じた。

「まさか……セレジュか？」

「やっぱり、シヨウマさん!!」

第6話 《神》待つ宇宙へ

「驚いた。まさかこんな近くに依頼主がいたとは」

病院の外。駐車場付近のベンチに腰掛ける少年に、麻玖木と別れたシヨウマが話しかける。

「はい。僕も驚きました。シヨウマさん、キャラメイクお上手ですね。そっくりです」

「お前もなかなかのもんだよ。昨日のこともあって、すぐにわかった。違うのも頭の羽根と服装くらいだし。ほら、オレンジジュース。俺の奢りだ」

「ありがとうございます。えと、改めて、僕はセレジユ……成瀬玲十郎ナルセレイジュウロウです」

飲み物の缶を受け取ったセレジユが本名を名乗り、シヨウマもそれに倣うことにした。

「柘翔真だ。ゲームと同じシヨウマでいい」

「じ、じゃあ僕も、セレジユで。その、シヨウマさん、昨日はすみませんでした。無理を言って依頼を引き受けてもらって……」

「もういいって。お前よりあのユークとかいう記者の方が無理言ってたしな」

「そ、そうですか。あはは……」

思い出してげんなりするシヨウマにセレジユは苦笑した。

「で、セレジユはなんでこの病院に？ 依頼のことと何か関係あるのか？」

単刀直入に切り込んだシヨウマに、セレジユは少し俯く。シヨウマはすぐに自分の失言だったと後悔した。

「あ、いや、話したくないなら、別にいいんだ。俺もそうだし……！」

愛想笑いを浮かべて、シヨウマは自分用に買った缶コーヒーのプルトップに指をかける。

「実はここに、僕の兄が入院してるんです」

セレジユは、シヨウマの向こうに立つ一般病棟に視線を投げた。

「ガンダムが好きで、ガンプラが好きで、GBNもサービス開始と一緒に始めたんです。だけど……」

「だけど？」

言い淀んだセレジユは、絞り出すように続く言葉を紡いだ。

「事故で、失くしたんです。利き手を……」

「な……」

「それ以来、兄さんは抜け殻のようになってしまつて、せつかく早いうちからCランクになつたGBNのアカウントも僕に譲つて、ガンプラから距離を置くようになったんです」

「じゃあ、GBNのセレジュは本当はセレジュのお兄さんのアカウントなのか」

頷くセレジュの目は、後悔に揺れていた。

「ギアを兄さんから譲り受けた時、僕は兄さんに言われるがまま、GBNでの兄さんの姿と名前を、僕のものに作り変えました。兄さんの目の前で」

「そりやまた、なんで」

「兄さんは、踏ん切りをつけるためだつて言つてました。実際、それからの兄さんはガンプラの話も、GBNの話もしなくなつて……。心が離れてしまつたんです。あんなに大

好きだったガンプラから」

セレジユは鞆から一冊のノートを取り出し、シヨウマに差し出した。

「兄さんがオリジナルのガンプラを作る時に使っていたアイデアノートです」

シヨウマがノートを開くと、そこには機体から武器まで、様々なアイデアがイラスト付きで記されていた。

「すごい情報量だ。本当に好きだったんだな。ガンプラが」

「はい。……後ろの方、見てみてください」

言われて開くと、そこには《Zガンダム》をベースにしたオリジナルガンプラの設計図があった。

「へえ、面白いコンセプトだな」

「僕、またあの頃みたいな兄さんに戻って、元気になってほしくて。今度の兄さんの誕生日に、その完成したガンプラをプレゼントしたいんです！ でも、そのためにはパーツ成型のためのBCが足りなくて……」

「なるほど。それで今度のミツシヨンの撃墜報酬が欲しいわけか。あの額があれば、パーツどころか、ちよつとしたフォースネストも買える」

「それに、僕、あまりバトルが得意じゃなくて……。いろいろ練習はしてるんですが……。だから、シヨウマさんにお手伝いしてほしいです」

「そういうことか……。よし！」

シヨウマは音を立ててノートを閉じると、勢いよく立ち上がり、セレジュの前に立った。

「要はお前に《デイビニダド》を一機でも倒させればいいんだろ？ 俺に任せろ。ヘル

パーのプライドにかけて、お前を援護するぜ」

その言葉を聞いて、セレジユの顔に笑顔が咲く。

「ありがとうございます！ よろしくお願ひします！」

「ただし！」

「へっ？」

「俺はあくまで援護だ。トドメは必ず、お前が撃て」

「……！ はい！」

シヨウマが突き出した拳に、セレジユも自分の拳を合わせた。



そして、ミッション開催当日。

限定ミッション専用のエントランスの先には、クロスボーン・バンガードの旗艦《マザー・バンガード》のモバイルスーツデッキを模した待機エリアが広がっている。

そこでは今回のミッションに参加するダイバーたちがミッションの開始を今か今かと待ち続けていた。

「ごめーん！ お待たせ！」

「ユーコさん、こつちです！」

「遅くないか？ 一応の依頼主だろ。もう始まるぞ」

先に待機エリアに入っていたセレジュとシヨウマに、ユーコが金色の髪を揺らしながら駆けてくる。

「社会人なめないですよ。取材相手はあなただけじゃないんだから」

「そりゃ悪かった。というか、あんたも出るんだな。てつきりギヤラリーにでもいるのかと」

「密着取材つて言ったでしょ？ 足手まといにはならないから、安心して」

「ユーコさんのガンブラって、どんなのなんですか？」

「ふっふっふ、それは見てのお楽しみよ」

そこに、ミツシヨンの開始1分前を告げるチャイムが鳴り、シヨウマ達の周囲からもダイバーたちが次々と姿を消し始めた。この音を合図に、ダイバーたちは自分のガンブラに搭乗し、出撃に備えるのだ。

「俺たちも行くか」

「はい！」

「オツケー！」

デイスプレイを操作し、シヨウマはセレジュやユーコと同じようにガンブラに搭乗する。

『あ、来た来た』

シヨウマがコクピットに入ると、《クインス》の音が響いた。

「さあ、今回はいつも以上に張り切っていくぞ」

『うん！ セレジュ君の事情がシヨウマ好みだもんね！ 私も頑張っちゃう！』

クインスの正面、閉じられていたハッチが開いて光が差し込む。シヨウマは操縦桿を握りしめ、ミッション開始10秒前のカウントダウンで大きく息を吸った。

「シヨウマ！ 《キマリスクインス》、いきますー！」

カタパルトが駆動し、悪魔の名を持つ白い機体が発進する。

第7話 限定ミツシヨン

無辺に広がる宇宙空間に、いくつもの星とバーニアの光が瞬く。

眼下に地球が見えるこの宙域が、今回の限定ミツシヨンのステージだ。

参加ダイバーはランダムに決められたスタートポイントから発進し、ゴールポイントで待つ木星帝国軍の旗艦《ジュピトリス9》を目指す。

『見て見てシヨウマ！ あれ《ヤークトアルケー》だよ！ あつちはハイモビリティの《E z - 8》！ 自作したんだ……！』

ステージに出た《クインス》は移動を続けながら、宇宙を飛び交う様々なガンプラたちに興奮気味の声を上げる。しかし、シヨウマはミツシヨンの同行者の方が気になっていた。

「それもいいけど、セレジユとユーコは？」

『後ろから来てるよ。近くに飛ばされてたみたい』

少女の声とともに、レーダーに灯る二つの僚機反応。

「―それが噂に名高いあなたのガンプラね」

先にシヨウマに追いついたのは、ユーコだった。

「《アウトフレーム》か。珍しい機体だな」

シヨウマは外を映すモニターに出た機体の姿に対して、素直な感想を口にした。

「《インサイトフレーム》よ。よろしくね」

ビビッドな赤い機体色が眩しい《アストレイ》系改造機が、右手に握ったガンカメラ

を振り、挨拶めいた動きをする。背中には上半身と同じ大きさのコンテナを背負っていた。

「シヨウマさん！ ユーコさん！」

ユーコに続いてセレジユも合流する。

「セレジユ君のガンプラは……へえ、《Z》^{ゼータ}の改造機！ 良い趣味してるじゃない」

「ありがとうございます。《プラスチックZガンダム》です」

本来の青い塗装の部分を深いオレンジに塗り替え、武装が追加された背中と、鋭利な輪郭を作る肩が特徴的な機体を、シヨウマは既に知っていた。

「それがシヨウマさんの《キマリスクインス》なんですね」

「まあな。それより、俺たちも急ごう。ここにはガンプラを見せに来たわけじゃない」

シヨウマの言う通り、こうして話しているうちにも三機の間を多くのガンプラたちが駆け抜けていく。

「そうですね。急がないと特別報酬が手に入りませんから！」

三機は速度を上げ、トップ集団に続く。

だが、トップ集団に追いついたのも束の間、レーダーに凄まじい数の敵機反応が表示された。

「敵だ！ 注意しろ！」

シヨウマの声の直後に、ビームの光条が押し寄せた。それは、敵機からの攻撃。そして、その敵とは……。

「《バタラ》！ それに《ガングリジヨ》も、あんなにいっぱい……」

《バタラ》をはじめとする、CPUの木星帝国軍であった。

「そう簡単には行かせないってわけだな。一気に突破するぞ！」

「はい！」

シヨウマの声にセレジユは操縦桿を握る手に力をこめる。

「じゃ、二人とも頑張つてね」

突然、ユーコの《インサイトフレーム》が動きを止めた。

「え？ ユーコさん、来ないんですか？」

「密着取材はどうするんだ？」

困惑する二人に、ユーコは得意げな顔をする。

「もちろんやるわよ。でも準備があるの」

ユーコの操作で機体の指の間から何かが飛び出し、それは内側から膨張するとダミー隕石になった。

「よっと」

ダミー隕石に《インサイトフレーム》がうつ伏せに寝そべる。すると背負うコンテナの八つの頂点からロッドのようなものがせり上がり、その先端が三角形に開いた。そして機体をダミー隕石ごと包むように光の膜が形成された。

『ショウマ、もしかしてこれ……』

ショウマにだけ聞こえるように抑えた声に、ショウマは頷いた。

「《アルミューレ・リュミエール》か」

《ハイペリオンガンダム》に搭載された堅牢な光の盾。《インサイト》を包みこんだのはまさしくそれであった。動作確認だったのか、光の膜はすぐに消えた。

「私はこうして身を守りながら、あなたたちを撮ってるから、好きなように暴れちゃってちょうだい」

「戦わないんですか？」

「ええ。報酬に興味は無いし、私は仕事だしね。いい動きしてくれたら、セレジュ君も今度の記事に載せちゃおうかな」

「ぼ、僕がGBジャーナルに?! ど、どうしよう……」

「後にしろ! 行くぞ、セレジュ!」

「へっ？ あ、は、はい！」

敵陣に飛び込む二機の《ガンダム》。

「おおおっ！」

《クインス》のドリルランスが《ガングリジヨ》の眼のようなメガ粒子砲を貫き、内蔵マシニングガンが火を噴く。

「やあー！」

《ブラストZ》はビームライフルの銃口を的確に敵機へ向け、次々と撃墜していった。

「やるな、セレジュ」

「練習はしてましたから！ あっ……！！」

シヨウマに意識を向けた一瞬の隙に、《プラストZ》のライフルが切断された。

「ライフルがつ!!」

爆発をシールドで防ぐも、その衝撃でセレジュとシヨウマに距離が生じる。

『シヨウマ、前から来るよ!』

少女の声に反応し、シヨウマは《クインス》の身体を捻らせる。

「木星帝国で見えない斬撃って言ったら……!」

シヨウマの予測通り、《クインス》の前にいたのは木星帝国のモビルアーマー《ノーティラス》であった。ライフルを破壊したのは、《ノーティラス》が放つ高振動ワイヤーによる攻撃だ。

再び放たれるワイヤー。その先端が《クインス》の右のシールドに突き刺さった。

「こんなのまで用意するなんて……」

真剣な表情でつぶやくシヨウマ。だが、すぐにその口は笑みを作る。

「やっぱりGBNは最高だな！」

《クインス》の左のシールドがドリルランスと連結し、シヨウマは照準を《ノーティラス》に合わせた。

「くらえっ！」

発射された特殊KPE弾《ダインスレイヴ》が、《ノーティラス》を貫き、黒い機体は爆散した。

「す、すごい……」

その様子を呆然と見ていたセレジユは、《クインス》がこちらを見たことで我に返った。

「セレジユ、まだ戦えるな？」

「は、はい。ライフルが破壊されただけで、機体にダメージはありません。武器もまだあります」

「よし、このまま一気に《ジュピトリス》に行くぞ！」

「わかりました！」



「おおー、さすがの動きね」

ダミー隕石に《インサイト》の身を預けて撮影に勤しむユーコは、シヨウマの獅子奮迅の活躍に舌を巻いていた。

「でも、やっぱりあの《キマリスクインス》、気になるのよねえ」

ユーコの本来の目的は、《クインス》の秘密を探ること。しかし、その秘密にはまだ近づけていなかった。

「乱戦に巻き込まれるのが嫌で距離取ったけど、もう少し近づいて—」

「おらあどけどけ!」

「きやあつ!!」

突如、背後から猛スピードで何かが飛来し、そして去ってしまった。あまりの勢いに、ダミー隕石ごと《インサイト》は大きく揺さぶられる。

「な、なによ。乱暴ね……!」

怒りを込めた感情で睨んだものに、ユーコは息を呑んだ。

「大きな……鳥?」

ユーコが見たのは、宇宙空間で翼を広げはばたく、巨大な鳥のようなガンプラだった。

第8話 悪意の翼

ミッション開始から十数分。

参加するダイバーたちの中には、木星帝国軍の防衛網を突破する者も現れつつあった。

シヨウマとセレジユも、《ノーティラス》に続いて待ち構えていた量産型《クアバーゼ》の一団を抜け、わずかに遅れてはいるものの、着実にゴールポイントの《ジュピトリス9》へ近づいていた。

「なんとか、武装を温存したままゴールに着けそうだな」

「戦闘を最小限にしてジュピトリスに向かうシヨウマさんの作戦が良かったみたいです
ね。撃墜数はあまり稼げてないですけど……」

並んで宇宙を飛ぶ無傷の《クインズ》と、携行武器をライフルからハイパー・メガ・ランチャーに変えた《ブラストZ》。シヨウマの声に応えながら、セレジユはレーダーの後方に未だ残っている敵機反応の群れに目をやった。

「気にするな。俺たちの狙いはあくまで《ディビニダド》だ。ミッションには撃墜数目当てに来てるダイバーもいる。そいつらに譲ってやろう」

「そうですね……ん？」

レーダーに新たな反応を探知する音が鳴り、セレジユは振り向く。次の瞬間、《クインズ》と《ブラストZ》のすぐ近くを何かが猛スピードで追い抜いて行った。

「い、今のは……」

セレジユは最大望遠にした《ブラストZ》のモニターでその機影をなんとか捉えることが出来た。

「《AGE―II》……の色違い？ でも、あのスピードは……」

とんでもない性能を見せつけられ、驚愕するセレジユ。しかしシヨウマには驚いた様子はない。

「ああ、あれはクジヨウ・キョウヤだな」

「クジヨウ・キョウヤ……って、たしか、最近スコアランキングをすごい勢いで塗り替えてる話題のドライバー！ お知り合いなんですか？」

「彼がGBNを始めたばかりのころ、ヘルパーの依頼を引き受けたことがあるだけさ。一緒に塩を探した。その時に見せてもらったのがあの《AGE―IIマグナム》だ」

「塩って、採集ミツションですか？ なんだか意外だな……」

セレジユは《クインズ》とあの《AGE―IIマグナム》が塩を探しに向かう光景をイメージし、そのシチュールさに苦笑した。

「ミツシヨンの内容に関わらず、依頼は受けるさ。彼、最近じゃフォースも作ったらしい。確かAVALONとかいったか」

「そんな人も参加してるんですね。でも、一人みたいですよ？」

「大方、個人的な腕試しと、BC集めだな。あのガンブラ、まだ未完成なんだぜ」

「未完成!! あの出来栄えで……?」

「クリアパーツを仕込みたいらしい。つと、おしゃべりはここまでだ。見ろ、《ジュピトリス9》だ」

シヨウマの言う通り、前方に巨大な宇宙船が見えた。

「ついに来たんですね……!」

「気を抜くなよ、セレジュ。ここからが本番だ」

二人が先頭集団に合流すると、ステージ中におどろおどろしい笑い声が鳴り響いた。

「こ、この笑い声はっ?」

『シヨウマ、来るよ』

少女の声に、シヨウマは乾いた唇を舐めた。

「ああ。総統閣下のお出ました……!」

《ジュピトリス9》の格納庫のハッチが開き、ついにその姿が露わになる。

遮るものが無い太陽光を反射する、白く巨大な身体。

身体の前で交差された、戦艦をも易々と破壊する両腕。

巨体に相応しい大きさに広がる、背中に生えた四枚の翼。

そしてもつとも恐ろしいのは、その身に宿す大量の核兵器―。

「こ、これが……《デイビニダド》……!」

「聞いてはいたが、10機も並ぶと壮観だな……」

その圧倒的な迫力に息を呑むセレジユ。シヨウマもその威圧感に息苦しさを感じた。

デイビニダドたちのアイ・センサーが一斉に輝く。それが開戦の合図だった。

ダイバーたちの駆るガンプラが、ミサイルやビーム、弾丸、果ては《ファンネル》や《GNファンング》まで、10機の《デイビニダド》に向けてけしかけける。

動き出した《デイビニダド》たちも、《フェザーファンネル》を同時に放出した。

「行くぞセレジユ！」

「はいっ！ 変形します！」

セレジユの操作のもと、《ブラストZ》が人型からウェイブライダーに姿を変えた。

「シヨウマさん！ 乗ってください！」

《クインス》が《ブラストZ》に乗り、しっかりと固定したことを確認したセレジユは、握りしめたレバーを思いきり前に倒した。

「やろう、《ブラストZ》！」

バーニアが青白い炎を噴き上げ、流星となった機体はビームと弾丸とファンネルの嵐を切り裂いて、一直線に《デイビニダド》へと駆ける。

集団から飛び出した形になった二機は、援護もない状態にもかからわず、他のダイバーたちよりも明らかに先行していた。当然、あらゆる攻撃の只中に晒されることになる。

だが、四方八方から飛来する攻撃を、《クインス》のシールドがアームを素早く伸ばしていなしていった。

「スピードを落とすな！ 一気に突っ切れ！ お前には弾丸一発かすらせやしない！」

「あ、ありがとうございます！」

セレジユはそのシールドさばきに内心で舌を巻いていた。が、当の《クインス》のクピットには少女の声が響き渡っているのだった。

『右！ 左！ 今度は上！ ひええ、多すぎるつてえ！』

「頼むぞ……。俺は攻撃、お前は防御。俺たち二人ならできないことはないんだ……！」

武装選択画面を開いたシヨウマは、一瞬のみ訪れるチャンスに全神経を集中させる。

そして、ついに《ブラストZ》は《デイビニダド》の一機の懐に飛び込んだ。

「よし、そのまま突っ込め！」

切っ先を真正面に向けた《クインス》のドリルランスが回転を始める。

二機の実在に気づいた《デイビニダド》のうちの一機が、左目に位置する中型のメガ粒子砲を撃ち放った。しかし、回転するドリルランスによってメガ粒子は四散。間合いは完全に《クインス》に有利なものとなった。

「おおおっ！」

《ブラストZ》から跳んだ《クインス》。ドリルランスが《デイビニダド》の長い頭部を穿つ。これで頭部内蔵の大型メガ粒子砲は潰された。

だが、それを補ってあまりある巨大な腕が《クインス》へと伸びていく。

『ショウマ!』

「ランスパージだ!」

その声と同時にランス本体と持ち手の接合部が煙を吹き、ランスを鞘としていた大剣が閃いた。

「腕、もらったあ!」

振り向きざまに剣を振るい、迫る巨腕を左右とも切り落とした。

猛撃はこれだけでは終わらない。腰に携えた刀を抜き、《デイビニダド》の左目に突き刺した。これで中型メガ粒子砲も使えなくなる。

この《ティビニダド》に残された武装は、《フェザーファンネル》と核ミサイルのみ。ただ、それは至近距離に迫るモビルスーツには無用の長物であった。

「セレジユツ！」

シヨウマが叫ぶ。《クインス》の真後ろから、再び人型に戻った《ブラストZ》が、《ティビニダド》の眉間、コクピットに当たる位置に向かって突進する。

「やあああつー！」

リアアーマーから取り出したビームサーベルを発振させ、ほとんど無防備なモビルアーマーのコクピットを狙う。

回避は不可能。防御も困難。シヨウマは依頼の達成を確信する。

しかし、その確信は、脆くも崩れ去った。

《プラストZ》の攻撃が当たる直前、それよりも先に飛来したものが《デイビニダド》の頭を粉碎した。

「なっ、なんだ!!」

予想外の出来事に、シヨウマの声に焦りが滲む。

「どこからの攻撃!!」

爆風の中から離脱した《プラストZ》の中のセレジュも、何が起きたのかわかっていない。

「ははははははっ！ ひゃーははははははははっ！」

宇宙に響く笑い声。それは、先ほどのものとは全く異質な、軽薄で、されど凶悪な、神経を逆撫でる不快な笑い声だ。

その声と共に、煙の中から飛び出す、大きな翼。

《ディビニダド》のものではない。そもそも、登場する作品が違う。

だが、シヨウマにもセレジユにも、その翼に見覚えがあった。

その翼を持つ機体こそ、デビルガンダム四天王の一柱。

「天剣……絶刀……!!」

「《ガンダムヘブンスソード》……!!」

「ははははっ！ 報酬はぜえええんぶう、俺のもんだあっ！」

ディビニダド
神を踏みつけにした悪魔の眷属たる凶鳥が、翼を広げ高らかに咆哮した。

第9話 邂逅する禁忌

《ディビニダド》を撃墜まであと一歩だったシヨウマとセレジュの前に現れた、デビルガンダム四天王の石柱、《ガンダムヘブンスソード》。

そのデュアルアイが、呆然とする《クインス》と《プラストZ》を捉えた。

「そこのお前ら、倒しやすくしてくれてありがとうよ！」

オーブン回線で入ってきた《ヘブンスソード》のダイバー声に、すぐさまシヨウマが咆えた。

「ふざけるな！ 俺たちの獲物を横取りしやがって！」

「おいおい、これは賢い戦術だぜ？ 他のダイバーどもが程よく弱らしてくれたエネミーを一気にかっさらう！ 楽しんで大儲けだ！ はははっ！」

「しよ、シヨウマさん……」

不安に満ちたセレジユの声が耳朶を打つ。シヨウマは胸の奥にふつつつと怒りの炎が燃え上がるのを感じた。

「こんなやつ放っておけ！ 別のを狙うぞ！」

セレジユを伴って移動しようとしたが、《ヘブンスソード》に回り込まれた。

「させねえよ。言ったら？ 報酬は全部俺のもんだってよお！」

《ヘブンスソード》が放った蹴りを受けた《クインス》は、すぐにバーニアを噴いて姿勢を制御する。

「いっつー！」

《ヘブンスソード》に立ち向かう意思を固めたシヨウマだったが、またコクピットに少女の声が響いた。

『シヨウマ……』

「どうした？」

『蹴られた時に感じた。あのガンブラ……なんだから、嫌な感じがする……！』

「嫌な感じ……？」

少女の言葉の意味がわからず怪訝な顔つきになったシヨウマだったが、《ヘブンスソード》が動いた。

「見せてやるぜ……俺の力を！」

《ヘブンスソード》の全身から、禍々しい紫色のエフェクトが滲み出る。

言いようのない恐怖に、セレジユは《プラストZ》をわずかに後退させた。

「な、なんだ、あれ……」

その異様な光景を見て、シヨウマは病院での麻玖木との会話を思い出す。

「まさか、あれがブレイクデカル……?!」

「ご名答！　だからよ……こういうことができちゃうんだなあ！」

《ヘブンスソード》の背中から無数のケーブルが飛び出し、一直線に飛んでいく。その先には、《ヘブンスソード》に撃墜された《デイビニダド》が浮いていた。

ケーブルが突き刺さった白い巨体が砂のように崩れ、ケーブルを通って《ヘブンスソード》へと流れ込んでいく。《ヘブンスソード》の翼が巨大化し、本来ならあるはずのない腕―、《デイビニダド》の腕が生えた。

「《ディビニダド》の残骸を取り込んだのか！」

「ひやはははっ！ 行けよフェザーファンネルウツ！」

広げられた翼から、夥しい数の鋼鉄の羽根が発射される。

「セレジユ、離れろ！」

シヨウマの叫びを聞いて《クインズ》と距離を取った《ブラストZ》の足元をフェザーファンネルが飛び、後方、他のダイバーたちが戦っていた別の《ディビニダド》に突き刺さる。

直後にまるで太陽のような大きさの火球が生まれ、周囲にいたガンプラたちを飲み込んで消えた。

「わああああっ！」

その衝撃はすさまじく、かろうじて爆発に巻き込まれなかった《プラストZ》を大きく吹き飛ばした。

「セ、セレジュー！」

「あーあ。力加減ミスつちまった。ちゃんと頭潰して倒さないと、中の核爆弾がドカーン！ 特別報酬も消えちまうもんなあ。くつくつく……！」

邪悪な笑い声に、シヨウマは直感した。

「お前、わざと……！」

「今ので邪魔なやつらはそれなりの数が消せたな。そんなじゃ、ゆつくり狩りを楽しむとするかね」

悠然と翼を伸ばして飛び去ろうとする凶鳥を、シヨウマは追い越し、立ちはだかった。

「あん？」

「GBNを……あいつが笑っていられる場所を、踏みにじるような真似は許さない！」

大剣と刀を握り、《クインス》が突進。

「うぜえんだよ！ ヒーロー気取りがあー！」

《ヘブンスソード》は、その巨大な腕で迎え撃つ。体格差は圧倒的だった。

「シヨウマさん……。僕も、戦わないと！」

加勢しようと姿勢を戻した《ブラストZ》に、背後から近づく機体があった。

「ちよつと、大丈夫？」

「ゆ、ユーコさんっ?」

ユーコの駆る《インサイトフレーム》だ。アルミユーレ・リュミエールは解除されている。ダミー隕石も捨ててきたらしい。

「もつと近くで撮ろうと思つて来てみたらすごい爆発があつたし、君は飛んでくるし、ていかなかに、あのキモいガンプラ。どうなつてんの?」

ユーコは《クインス》と戦う《ヘブンズソード》を一瞥した。

「実は、ブレイクデカールを使つてるみたいで……」

「ブレイクデカール? あれが……」

《インサイト》の右腕が動き、変貌した《ヘブンズソード》にガンカメラを向ける。

「……ん? あれ?」

だが、不可解な現象が起こる。

「セレジユくん、あのガン普拉、見えてるわよね？」

「何言ってるんですか？ あそこでシヨウマさんと戦ってるじゃないですか！」

「いや、そうなんだけど、写らないの。撮ってるはずなのに、あのガン普拉だけ、写真に写らないのよ……！」

「写らないって、いったい——」

「セレジユ、ユーコ！ 逃げろっ！」

言葉の途中。シヨウマの声が弾け、視界の明度が一段階下がった。

「なにを、コソコソしてるんだあ？」

《ヘブンスソード》が取り込んだ《デイビニダド》の腕が、《ブラストZ》と《インサイト》に伸びていたのだ。

「させるかあっ！」

二機を握りつぶさんと広がった腕を、《クインス》の大剣が切り裂く。しかし、それすらも罠であった。

「よう、助けると思ったぜ？ ヒーロー」

「な……い！」

斬られる前に分離していた巨腕に意識が向いていたことにより、シヨウマは失念していた。

《ヘブンスソード》は本来、接近戦を得意とするモバイルファイターなのだ。そして、必

殺技も持っている。

「ハイパアアアアア！ 銀色の脚イイイ！ スペシャアアアアルツ！」

「うあああつ！」

怒涛の連続攻撃が《クインス》を襲い、機体を吹き飛ばした。

「シヨウマさん！」

「シヨウマ！」

「てめえらもだ！ ウインドファイアアアアアツ！」

翼のはばたきから炎の渦が発生し、《ブラストZ》と《インサイト》を飲み込んだ。

炎に囚われた二機は、即刻の撃墜は免れたものの、ダメージが蓄積されていく。

「こ、このままじゃ、僕たちも……!」

「ちよつとシヨウマ! なんとかしてよ! ヘルパーなんですよ!」

ユーコの叫び声は、シヨウマには聞こえていなかった。

「くそつ、動け! 動いてくれ……! こんなことで、お前を……!」

暗くなったコクピット。シヨウマがレバーを引くが、《クインス》は反応しない。

「俺たちはまだ戦える! そうだろ!! 頼むから動いてくれ! ……カリン!」

シヨウマが必死に呼びかけるも、機体は沈黙を続ける。

「……ダメ、なのか……」

操縦桿からシヨウマの手が離れる。

『許さない……』

「え……？」

少女の声が、聞こえた。

『シヨウマを、いじめるやつは……！』

コクピットに赤い光が灯る。ダメージアラートではない。シヨウマが見たことのないほどの真紅に染まっていた。

『私が倒すッ！』

滑らかな挙動で傍に浮いていた刀を掴み、動き出した《クインス》。だが、それはシヨウマの操作によるものではなかった。

「コ、コントロールが……!!」

《クインス》が勝手に動いている。言葉では説明できても、シヨウマは理解できなかった。

「死に損ないが！ 今度こそ沈めてやる！」

再起動した《クインス》に気づいた《ヘブンズソード》が炎を止め、再びフェザーファネルの大群を放つ。

しかし、押し寄せる鋼鉄の羽根を《クインス》は稲妻のような動きで躲し続け、《ヘブンズソード》に近づいていった。

「当たらない!! だつたらあつ！」

炎の渦が《クインス》に襲いかかるが、それすらも物ともせず、一気に間合いを詰め

た。

「てめえ、いきなりなんだってんだ！」

蹴りを放つも、容易く回避され、その脚を叩き切られた。

「こいつ、動きが急に変わって——うおおっ！」

《クインス》の手が《ヘブンズソード》の首を掴み、締め上げる。

「どうなってる！ どうして勝手に動くんだ！」

その間もシヨウマはコクピットで操縦桿を動かしているが、シヨウマの意思は《クインス》の動きにまったく反映されていなかった。

「何だってんだよ、お前、大したことなかったくせに、急に強く……！」

モニターに映る《クインス》の顔に、恨み言をぶつける《ヘブンズソード》のダイバー。

「……あ？」

それは、ただの気のせいかと思ったが、違う。彼には見えた。《クインス》のツインアイの奥に、怒りに満ちた瞳が。

「気持ち悪い作り込みしやがっ——」

言い切る前に、《ヘブンズソード》のコクピットは、《クインス》の膝に内蔵されたドリルによって潰されたのだった。

第10話 大気圏の決着

《ヘブンズソード》の胴体を貫いた回転式パイルバンカーが抜け、《クインス》が蹴り飛ばす。凶鳥は、音もなくミツシヨンエリアから消滅した。

「す、すごい……。あつという間に倒した……」

「あれが、ヘルパーシヨウマの実力なのね」

ただ見ていることしかできなかつたセレジュとユーコは、動かなくなつた《クインス》に畏怖の眼差しを向けていた。

「カリン！ どうしたんだ！ カリン！」

だが、そのコクピットの中では、シヨウマが叫び続けていた。

「返事をしてくれ！ カリン！」

すると、コクピットを染めていた赤い光が消え、通常の内部状況に戻った。

『あ、あれ……？ 私、なにを？ 確か、《ヘブンスソード》に蹴られて……』

コクピットに少女の声が響き、シヨウマは安堵の表情を浮かべた。

「カリン！ よかった……！」

『シヨウマ……？ あつ、《ヘブンスソード》は!!』

「何言ってるんだ？ お前が倒したんじゃないか？」

『私が……？ 全然、覚えがないんだけど……』

会話に謎の齟齬が生まれていることに疑問符を浮かべるシヨウマだったが、接近して

きた《ブラストZ》と《インサイトフレーム》に気づいてそれ以上の追究は止めた。

「すごいですシヨウマさん！」

「びつくりしたわ。でも、ああいう画が欲しかったのよ」

「あ、ああ。でも、特別報酬は……」

本来セレジユが倒すはずだった《デイビニダド》は、《ヘブンズソード》に横取りされてしまった。これでは、セレジユが獲得するのは目標には程遠い額のBCと、申し訳程度のダイバーポイントだ。

「仕方ありませんよ。まさか、ブレイクデカールが本当に存在して、僕らが邪魔されるなんて、思いもありませんでしたし」

「そうね。残った《デイビニダド》は3機。ダイバー同士が足を引っ張り合ってるから、かろうじて生き残ってるけど、遅れてたダイバーたちもかなりの数が合流してる。今か

ら戻っても乱戦に巻き込まれるのがオチだわ」

冷静に分析してみせるユーコに言いたいことはあつたが、シヨウマはそれよりもセレジユへの謝罪を優先した。

「本当にすまなかつた。別の高額報酬ミッション、手伝わせてくれ」

「そ、そんな！ いいんですよ、僕の我儘みたいなもので――」

と、けたたましい警報のような音が宇宙に鳴り響いた。

「な、なんだっ？」

「新しい敵、でしょうか？」

「え、またなんか来るわけ？」

周囲を警戒する三人。だが新手は現れず、代わりにコクピット内の三人に同じ表示が浮かんだ。

『ミッション最終フェーズ。地球に降下する《デイビニダド》を止めろ』……?』

「シヨウマさん！ ユーコさん！ あ、あれを！」

《ブラストZ》が示した方向を見ると、3機の《デイビニダド》が忽然と消えた。

すぐさまその姿は再び現れるのだが、3機とも別々の位置から大気圏へと突入していた。

「おいおい、いきなりすぎるだろ……」

「うわー……戦ってた人たち、不憫すぎる」

少し冷めた目でその光景を見ていたシヨウマとユーコ。

「もしかして、あれを放っておいたら、ステージとはいえ、あの地球で核爆発が起こるんじゃない……」

セレジユは《デイビニダド》という機体の設計思想を思い出し、冷や汗を流した。

『シヨウマ！ こ、これ見て！』

突如、興奮気味の少女の声とともに、シヨウマの前に索敵レーダーが表示される。

「な、なんだよ……！ 二人に気づかれるって……」

『それより、私たちに一番近い《デイビニダド》の形式番号読んで！』

「型式番号？」

言われるがまま、シヨウマは型式番号を指を添えて読む。

「E M A—1 0 U C—0 1 5 3 ……っ！ セレジュ！」

「は、はいっ!!」

「まだ終わりじゃない！ あの降下してる《デイビニダド》を追うんだ！」

「ちよ、ちよつとシヨウマさん!!」

「な、なによなによ？ どうなってるのよー！」

突然動き出した《クインス》の後を追ひ、《ブラストZ》と《インサイト》が地球に向けて飛ぶ。すぐに重力に引かれ、大気圏突入が始まった。

「シヨウマさん、乗ってください！」

ウェイブライダーとなった《ブラストZ》に乗った《クインス》。その少し後ろにアル

ミューレ・リュミエールを展開した《インサイト》が続く。

「ねえ、私クロスボーンガンダムはまだちゃんとして読んでないんだけど！ これって原作再現なの？」

「一応な！ つて今はどうでもいい！ ユーコ、そのアルミューレはこの突入の後もまだ使えるか!!」

「え？ ええ。もちろんよ。自慢じゃないけど、私の《インサイト》はそんじよそこらの――」

「よし！ 手短かに話すぞ。セレジュ、突入が終わったらモビルスーツに戻って、あの技の準備だ」

「え!! で、でもあの技じゃ、《ディビニダド》の頭部だけを破壊なんて細かいことは……」

「それでいい。ユーコは俺と一緒に来てくれ。お前のガンプラが頼りだ」

「わ、私、できれば戦いたくないんだけど……。あの技って?」

「それで構わない。突入したら一度アルミユーレ・リュミエールを切って、その後で俺が指示するタイミングで再展開してほしい。それも全力で」

「た、盾の代わりにする気!!」

「そうじゃない! でも、これが終わったら今度はちゃんと取材を受ける。約束だ。だから今は頼まれてくれないか?」

真剣な声に、《インサイト》のコクピットのユーコはまんざらでもない顔を作った。

「そういうことなら、まあ……。いいけど」

「シヨウマさん、突入もうすぐ終わります!」

セレジユの報告の数秒後、元となる世界観が異なる三機の《ガンダム》が、どの作品でも変わらず存在する地球の空に飛び込んだ。

「行くぞ二人とも！ 俺を信じてくれ！」

《ブラストZ》の背を蹴って、自由落下に入る《クインス》。その横には光の盾を解いた《インサイト》が並ぶ。

「《ディビニダド》が動くわよ！」

振り返った《ディビニダド》が僅かに身体を傾け、頭頂をシヨウマたちに合わせた。

そして頭部が開き、隠された大型メガ粒子砲の砲口が露出する。

「行くぞ……！」

《クインス》が伸ばした腕が、《インサイト》の首根っこを掴む。

「え？」

「おおおおりやあああああつ！」

そして、デイビニダドの開いた頭に向かって思い切りぶん投げた。

「ええええええつ！！」

すでに発射直前のメガ粒子砲の中に投げ込まれ、驚愕の叫び声があがる。

「今だユーコ！ アルミューレ・リュミエール、全開！」

「ああもうっ！！」

最大出力で展開される光の防壁。展開の完了と同時にメガ粒子砲が発射される。

しかし、解き放たれるはずのメガ粒子は出口で塞がれ、行き場を失って暴発。《ディビニダド》の頭部メガ粒子砲は爆破崩壊した。

爆発の勢いで《インサイト》が離脱し、セレジユの出番が回ってきた。

「決めろ！ セレジユ！」

「シヨウマさん、ユーコさん、ありがとうございます！」

《ブラスト乙》のフライングアーマーが背中から分離、変形して作られる一振りの剣。刀身からエネルギーが迸り、倍近い長さのビームサーベルとなる。

「いつけえええええつ！」

振り下ろされるビーム刃。《ディビニダド》は防御できず、真つ二つに両断された。

爆炎に飲まれる《ティビニダド》。確かに大きな爆発であったが、三機の《ガンダム》は健在だった。

「核爆発が、起きない？」

「なに……？ 何も起きないじゃないの」

《プラストZ》の撃墜スコアには、確かに《ティビニダド》を撃墜したことが記されている。

セレジユもユーコもわけがわからないまま、そう間を置かずに、ミッション終了を告げるブザーがエリア全体に響き渡った。

第11話 戦士の報酬

「まったく！ 信じらんない！ 発射直前のビーム砲に放り投げるなんて！」

限定ミッションを終え、フリーエリアに戻ってきたショウマは、さっそくユーコに怒鳴られていた。

「わ、悪かったって。でも、うまくいったら？」

「結果論じゃない！ すっごく怖かったんだから！」

その様子を見ていたセレジュは、ショウマにミッションが終わってから気がかりだったことを尋ねた。

「あはは……。でも、ショウマさんはどうしてあの《デイビニダド》に核兵器がないってわかったんですか？」

セレジユに問われ、シヨウマはユーコをなだめながら説明する。

「クロスボーンの続編のゴーストには核兵器が搭載されていない《デイビニダド》が登場するんだ。で、あの《デイビニダド》だけ型番の横にゴーストの時代と同じUC—0153って書かれてて、もしかしたらってな」

「そういうことだったんですね。僕、自分で斬っておいてすごく焦っちゃいました」

「そう！ セレジユ君すごかったわ！ あのおっきいビームサーベル！ ライザーソードみたいだった！」

「えへへ、ありがとうございます。《プラストZ》のハイ・メガ・ブレードです」

そこへ、三人に近づく一人のダイバーの姿が。

「やはり君だったか。シヨウマ」

「キョウヤ！ わざわざ声をかけに来てくれたのか？」

そこに立っていたのは、のちにチャンピオンの称号を得るダイバーであるクジヨウ・キョウヤその人であった。

「移動中に見覚えのある《キマリス》を見かけたが、急いでいたのでね。挨拶が遅れてすまない。元氣そうで何よりだ」

「こつちこそ光栄だよ。覚えていてくれてたなんて」

「忘れるはずがないさ。今の私があるのは、あの時に君がいてくれたおかげだよ。後にも先にも、あれほど心躍る塩探しはなかった」

「ああ。俺もだ。あのあとしばらく、他の依頼が物足りなくなった」

がつつちりと、固い握手を交わす二人。

「お二人がしたのって、採集ミッションですよね……?」

「ヘルパーって顔が広いのね……」

完全に置いてきぼりのセレジユとユーコに気づいたキョウヤは意外そうな顔を作った。

「おや、ユーコさん」

セレジユはキョウヤがユーコの名を呼んだことに驚いた。

「え、ユーコさんもお知り合いだったんですか?」

だが、当のユーコは「違う違う」と笑って首を横に振る。

「私がこのミッションの前に取材してたの、彼なのよ」

「ああ、なるほど」

「シヨウマ、君もフォースを作ったのかい？」

「え？ ははは。違うよ。ただの依頼人さ」

「そうか。君ほどの腕だ。勧誘も多いんじゃないか？」

「まあな。その気はないってのに」

にこやかに聞いていたキョウヤの顔が、ふと真剣なものに変わった。

「シヨウマ、先ほどのミッションだが、あの《ヘブンスソード》は――」

「気づいてたか。あれが、噂のブレイクデカルなんだろうな」

シヨウマの脳裏に、《ディビニダド》と融合した異形の凶鳥の姿が浮かぶ。

「すまない。救援に駆けつけたかったが、乱戦の只中にいてしまった。不甲斐ない」

「気にしないでくれ。あんな突然出てこられたら、対処するのは難しい」

「でも、シヨウマさんは倒せてましたよ。それも一瞬で！　すごいです！」

《クインス》の戦いを間近で見っていたセレジユは、興奮気味に頭の羽根を動かして称賛の声を送る。

「あ、ああ……」

だが、シヨウマ自身はそれを素直に受け取ることとはできなかった。

「ブレイクデカールねえ。まさか写真にも残せないなんて」

ユーコは《インサイト》で撮影した写真を一覧で表示するが、《ヘブンスソード》の姿はなく、《クインス》が見えない何かと戦っているかのような画像ばかりが並んでいた。「あんなに暴れておいて……。作り手の陰険さを感じるわ。作ったのはきつとGBNのアンチよアンチ」

ユーコがディスプレイを消すと、キョウヤは三人に向けて告げた。

「ブレイクデカールのことを認知しているなら話は早い。まだ発見例は少ないが、ブレイクデカールの使用者は今後増える可能性もある。正しくGBNをプレイするダイバーたちを守るためにも、君たちも協力してほしい」

「わかった。初心者ダイバーたちに注意するよう呼びかける。俺にとっても他人事じゃなさそうだしな」

「私も上に報告して、注意喚起の記事を作れないか掛け合ってみるわ」

「は、はい！ 僕も、できることがあれば協力させていただきます！」

「ありがとう。では、私はこれで」

そう言つてキョウヤは、フォースのメンバーらしき揃いの衣装の男女二人のダイバーとともに去つていった。

「クジヨウ・キョウヤ、取材の時も思ったけど、堂々としてるわ……」

「そうですね……。さてと、それじゃあそろそろ報酬の話をしましょうか」

「……………」

「シヨウマさん？」

「どうしたのよ、ぼーっとして」

「えっ？ あ、ちよつと考え事をな。ブレイクデカールのこともあるし」

「もう、あなたが報酬はちゃんと払えって言ったんでしょ。しっかりしなさいよね」

「あはは、悪い悪い……」

曖昧に笑うシヨウマに身体を向け、セレジユはBC管理のディスプレイを開く。

「今回の報酬は入手BCの2割だから、30万BCですね」

同じく管理ディスプレイを開いていたシヨウマは、BCの譲渡を確認した。

「シヨウマさん、ユーコさんも。本当にありがとうございました」

礼儀正しく頭を下げて感謝を述べるセレジユに、シヨウマとユーコは微笑む。

「いいんだ。これが俺のGBNでの仕事だからな」

「そーそ！ 私もこいつから追加取材のオツケーもらえたし！ 万事円満ね！」

「キョウヤは『彼』で俺は『こいつ』かよ……」

「ビーム砲に女の子投げるようなやつは『こいつ』で十分よ。安心なさい。記事ではちゃんと書くから」

ユーコは踵を返すと、ゲートに向かって歩き出した。

「今回のミッシヨンのこと、クジヨウ・キョウヤのインタビューと一緒に近いうちに投稿するわ。追加取材の件は追って連絡するけど、逃げたらマジであることないことであつちあげるから、そのつもりでね？」

「お、おう……」

「ユーコさんって、綺麗ですけどちょっと怖いですよね……」

顔を引きつらせて見送ったシヨウマとセレジユは、いよいよ二人きりになった。

「よかったな、セレジユ。お兄さん、きつと喜ぶぞ」

「はい！ これで、兄さんの作りたかった《ブラストZ》を完成させられます……！」

既に心はガンブラ作りに向き始めているセレジユに、シヨウマは拳を突き出す。

「……？ なんですか？」

「依頼完了の証明みたいなものだ。セレジユ、GBNは楽しいか？」

「……はいっ！」

そしてシヨウマと拳を合わせ、セレジユもGBNからログアウトした。



エリア11。

初心者用サーバーに存在するこのエリアの、ラグランジュ4の資源衛星群。

宇宙であつても殺伐とした印象のこの領域に、《ヘブンズソード》を操縦していたダイバーはいた。

「すまねえ。せつかくもらつたブレイクデカル、ダメにしちまつた」

謝罪の言葉を述べた相手は、仮登録ダイバーに与えられるアバターであるマスコットロボット《ハロ》だ。

「気にするな。あれは試作品。一度使用したら自壊するようプログラムしてある」

深い紫色で目つきが悪い球体から発せられる声は、静かで、冷たい。

「お前の戦いぶりは見せてもらった。おかげでいいデータが採れた」

「へへ、じゃあ報酬は……」

「ああ。もう送つてある。今回渡したものを改良したブレイクデカード」

「よっしゃあ！ これでまた暴れられるぜ！ じゃあな！」

忙しく去っていくダイバーを最後まで見送らず、《ハロ》は広大な宇宙に視線を投げる。

「せいぜい楽しめ。この生温い世界をな」

その声に憎悪と怒りを込めて。

第12話 棄てられた翼

限定ミッションが終わりGBNからログアウトした直後に、ショウマは麻玖木に連絡を入れた。しかし、すぐには連絡が取れなかった。

バイクで病院に急行したがそれも空振りに終わり、やっと麻玖木に会えたのは限定ミッションから三日が経過した夕方であった。

「すまない。すべての予定をキャンセルして帰ってきたが、存外に時間がかかってしまった」

「しょうがないですよ。まさか海外にいたなんて……」

いつもの資料室の空気に、ショウマと麻玖木が飲むインスタントコーヒーの香りが混じる。机に置かれたパソコンには、限定ミッションで起きた《ヘブンズソード》と《クインス》の戦いの記録映像が流れていた。

「これが、君の言っていたブレイクデカルを持つガンプラか」

麻玖木がそう言ったところで、『ディビニダド』の残骸が凶鳥と融合を果たす様子が映る。

「……醜悪だな。作品に対する敬意も、他のダイバーへの礼節も感じられない」

冷たい声で言い切った麻玖木に、シヨウマも肯定した。

「乗っていたダイバーも、あまりいい印象は持てませんでした。それに……」

「君の大切な人を傷つけた、か」

画面の中で蹴り飛ばされる『クインス』に、シヨウマは拳を固める。

「でも、このあと、わからないことが起きるんです」

力なく宇宙を漂う《クインス》が突然動き出し、すさまじい挙動で動きながら、瞬く間に《ヘブンズソード》を撃墜した。そこで麻玖木が映像を止める。

「ここか。《クインス》が勝手に動いたそうだが」

巻き戻された同じ場面を見たシヨウマは、パソコンの横に置かれたHGサイズの《クインス》に視線をずらした。

「はい。あれはまるで――」

「彼女が動かした、と?」

続く言葉をなくし、シヨウマは硬い表情で首肯する。麻玖木は鞆からファイルを取り出し、シヨウマに差し出した。

「なんです、これ?」

「彼女のここ数日の脳波の記録だ。君と会う前に確認していたら、気になる点があった」

ファイルから取り出した紙には、どれも一定の周期で線が波打っている。しかし、三枚目の紙だけ、波線の一部の振れ幅が激しく上下していた。

「見ての通り、測定値に激しい揺らぎが生じている。日時も、ちょうど君たちが《ヘブンズソード》と戦っていたタイミングと合致しているんだ」

「それって……!」

「ああ。ブレイクデカールが、《クインス》と彼女に何かしらの影響を与えたと考えるのが自然だろう」

《クインス》に伸びた麻玖木の手が丁寧に背中中のパーツを外すと、ガンダムフレームを再現した内部構造が露わになる。その中心は金属パーツで、何かを覆うように蓋をされていた。

「万が一ということもある。念のため、こちらでも確認しよう」

その蓋を開けると、極小のチップが入っていた。麻玖木はチップをダイバーギアによく似た端末に挿入し、接続されたパソコンを流れるデータに目を通していく。

シヨウマもそれを固唾を飲んで見守る。

小指の先ほどの大きさしかないチップには、シヨウマにとってかけがえのない大切なものが刻み込まれているのだ。

「……うむ、データの損傷はないな」

「よかった……!」

「だが、今後もブレイクデカルとの遭遇は考えられる。取り返しのつかない事態になる前に策を講じないといけないな。君、というより彼女がGBNを離れるという選択肢

を持たないだろう?」

「はい。俺もカリンも、GBNは好きですから」

言うや否や、資料室の扉が勢いよく開かれた。

「あれえ? 誰もいないと思っただのに」

そこにいたのは、まだ幼い男の子。この病院に入院しているのかパジャマ姿だ。

「おや、どうしたんだい?」

パソコンを閉じた麻玖木が柔和に尋ねると、男の子はいたずらっぽく笑った。

「今ね、かくれんぼしてるの! 僕以外はみんな鬼なんだよ! このガンプラ、僕のものにしたいから!」

「は………!!」

男の子が見せてきたガンプラに、シヨウマは思わず声を出した。

「《ブラストZ》!!」

間違いなく、セレジユの駆る《ブラストZガンダム》。シヨウマは男の子に近づき、視線を合わせるために膝を折った。

「お、おい、そのガンプラ、どうしたんだっ？」

「これね、親切なお兄ちゃんがくれたの！ カッコいいでしょ！ でも、みんなも欲しいってなって、僕のものにするか、みんなのものにするか決めるためにかくれんぼしてるんだ！」

男の子の言葉の後半はほとんど耳に入らず、シヨウマはその小さな両肩を掴んだ。

「くれた!! セレジュが!! どういうことだよ!」

「え……?」

あまりの剣幕に固まってしまう男の子。

「シヨウマくん、ここは任せたまえ」

シヨウマの前に出た麻玖木は、白衣のポケットから小さな包みを取り出し、少年に差し出した。

「すまない。驚かせてしまったね。でも、そのガンプラはこのお兄さんの大事なものなんだ。よかったら、このチョコレートと交換してくれないかな? お友達と一緒に食べるといい」

「え、う、うん……」

呆然とする男の子の手にチョコの入った包みを握らせ、《ブラストZ》を受け取る麻玖木。

「見つけたわよ！ そんなところに隠れて！」

そこにまた別の声が響く。今度は女性の声だ。

「あつ、カルタせんせー！」

「苺田よ、カ・リ・タ！ まったく、怪我でもされたらあなたのご両親に合わせる顔がないというのに……！」

シヨウマ達の前に現れた白髪でツリ目の女性医師。この病院の小児科医である苺田周子^{シュウコ}であつた。

「やあ、苺田先生」

「ま、麻玖木!! どうしてここにいるのよ! 海外の論文発表会に行ったはずじゃ……」

漫画のようにぎよつと驚く苺田。麻玖木とは医大からの付き合いであった。

「急を要する事態が起きてね。日程を早めて戻ってきたんだ。相変わらず、子どもに好かれていたようだな」

「ふ、フンツ! あなたこそ、この病院の女性たちにもてはやされて、いいご身分ですね」

「はは、男性医師たちからの視線が怖くて、こうして隠れさせてもらっているよ」

「爽やかに言ってくるのが本当に腹立つわこの男……!」

ぐぎぎ、と唸る苺田だったが、すぐに本来の目的を思い出し、男の子に顔を向けた。

「こんなやつの手をしている場合じゃなかったわ。ほら、戻るわよ。他の子たちも待ってるわ。検査をちゃんと受けないと、治る病気も治りませんよ」

「はあい」

「それと、あなた」

「え、お、俺？」

急に話を振られ、シヨウマは思わず背筋を伸ばす。

「顔に疲れが出ているわ。若さにかまけてないで、ちゃんと休養は取りなさい」

「は、はい……」

シヨウマの返事に頷いて、苅田は男の子を連れて行った。

「さすがだな。苅田。一目見ただけで、シヨウマくんにまで指摘をするとは」

「いい先生、みたいですわね」

「私の頼れる同期さ。で、これは取り返したが、どうするんだい？」

「《ブラストZ》……」

麻玖木から受け取った《ブラストZ》に、シヨウマはセレジユの姿を重ねた。

あれほど思い入れがあつたガンプラを、知り合いでもない子どもに渡すような事態になつた理由が、シヨウマにはわからなかつた。

だから、確かめたいと思つたのだ。

「……すみません。ちよつと、行つてきます」

「この間の少年と、関係があるのかい？」

「そんなところですよ」

「そうか……。わかった。《クインス》の調整はやっておく。用事が済んだら取りに来な
きゃ」

「ありがとうございます。それじゃあ！」

《ブラストZ》を手に、走り出すシヨウマ。

「やれやれ。病院は静かに移動してもらいたいのだがな」

一人になった麻玖木は、資料室を内側から施錠し、机に向かった。引き出しを開けると、手入れの行き届いた模型用工具がずらりと並んでいる。

「さて、面白くなってきたじゃないか。あなたもそう思うだろうか？ ミス・トリー」

デザインナイフを手に《クインス》を見る目は、怪しく光るのだった。

第13話 想いだけでも

鳳修大学附属病院のとある病室。

窓際のベッドから身を起こし、物憂げな表情で外を見る少年がいた。

少年名は、成瀬隆一郎。セレジユもとい玲十郎の兄である。

右の手首の先からはなく、包帯が巻かれている。

「……………」

右腕に視線を移したとき、病室のドアが開く音がして、数秒後に仕切りのカーテンが開かれた。

「まだ何か用があるの……………か？」

弟かと思つて振り向いたが、そこにいたのは、彼にとってまったく面識のないシヨウマだった。

「お前が、セレジュの兄貴だな？　セレジュは……いないか」

「だ、誰だ……？　玲十郎の知り合いか？」

「まあな。柊翔真だ。GBNでヘルパーをやつてる。お前の弟は俺の依頼人だった」

「依頼人？」

特に断りもなくベッドの横にあつた椅子に座つたシヨウマに目を白黒とさせたが、すぐにシヨウマの手に握られているものに気づいた。

「それ……！」

「ん？ ああ、そうだよ。《プラストZガンダム》だ」

「そんなことわかってる！ なんでアンタが持つてるんだ！」

「おいおい、落ち着け。これを振り回して遊ぼうとする子どもから取り返したただだよ」

「子ども……？ 玲十郎のことか？」

「いや。ここに入院してるもつと小さな子たちさ」

「ますますもってわけがわからない隆一郎をよそに、シヨウマは《プラストZ》をベッドに付いたテーブルに乗せ、その全体を改めて見た。

「いいガンプラだ。パーツも、ディテールも、塗装も、どれひとつとっても丁寧で、心を込めて作られてるってわかる」

隆一郎もシヨウマが称賛したガンプラに視線を動かすが、すぐに目を伏せた。その様

子で二人の間に何かあったことを確信し、シヨウマは本題に入る。

「これ、誕生日プレゼントなんだってな。なかなかニクいじゃないか。自分の考えたガンプラ作ってくれるなんてさ。……それがどうして、こんなことになる。お前、セレジュと何があつた？」

「これは俺たち家族の問題だ。関係ない人が口を挟まないでくれ」

「そうしてもよかつたんだけどな。あいつとリアルの付き合いをしたのが運の尽きだ。だから、依頼後のアフターサービスだ」

「そんな理屈が……!」

「なにより」

シヨウマはセレジュと似た雰囲気顔の顔に詰め寄った。

「なにより、見過ごせないタチなんだ。家族の不和つてやつを」

ワントーン下がった声に、隆一郎は観念したようにベッドに身体を預けた。

「……ガンプラから、離れようと思ったんだ」

絞りだされる声を聞き逃さないように、シヨウマは隆一郎に意識を集中する。

「玲十郎にはモデラーの才能がある。けど、俺にはそれがない。だから、こんな腕になったのも、いい機会だと考えた」

「それでノートを渡して、GBNのアカウントも譲った、と」

知ってるのか、そう言いたげに少年の目が揺れる。

「でも、日を追うごとに、また作りたい、GBNに行きたいって気持ちが強くなっていった。けど、そこにこれさ」

隆一郎は左手で《ブラストZ》を自分の正面に向けた。

そう長くはない静寂のあと。突然、隆一郎の目から涙が溢れだした。

「お、おい……」

「完璧なんだー！」

隆一郎の肩に触れようとしたシヨウマの手が、張り上げられた声にびくりと止まる。

「は………？」

「アンタの言う通りだ。完璧だよ……。パーツも、ディテールも、塗装も、全部！ 全部俺が考えていた通りのものだ！」

賞賛であるはずの言葉が、慟哭と共に吐き出される。

「だけど違うんだ！ これは玲十郎が作った、玲十郎の《ブラストZ》だ！ 俺のじやない！ 自分で、この手で、完成させたかったんだよお……！」

喉を震わせて泣くばかりになってしまった隆一郎に、シヨウマはため息をついた。

「だから贈られた《ブラストZ》を拒絶して、仲違いか。……バカだなあ、お前」

「え……」

「大方、この《ブラストZ》を当てつけだとも曲解したんだろ。もう一度、よく見てみる」

隆一郎は、弟から贈られた《ブラストZ》をもう一度見た。

「こいつのパーツには、GBNをでなきや手に入らないパーツがいくつも使われている。総額で考えればかなりの額のBCが必要だ。でも、大事なのはそこじゃない」

シヨウマの脳裏に、GBNで懸命に戦っていたセレジユの姿がよぎる。

「あいつはそれをほとんど一人でやってたんだ。お前に喜んでもらうために。抜け殻みたいになっちまった、お前のためにだ」

「俺の、ため……?」

「よく考えてみる。お前のアイデアをここまで忠実に再現してくれたんだぞ。その意味がわからないわけじゃないだろう?」

《ブラストZ》を手に取った隆一郎は、頬を伝う涙で《ブラストZ》の肩を濡らした。

「わかってたさ。本当はあの時、ありがとうって言うべきだったことは……。わかって、いたのに……!」

「そこまでわかってるなら上等だ。ちゃんとセレジユに言ってやれよ」

涙をぬぐった隆一郎の表情はなおも暗い。

「でも、ひどいことも言ったし、しばらくは、来てくれなさそうで……」

「何言ってるんだ。これから会うんだよ」

「これから……?」

「なあに、これもサービスのうちだ。ちよつと待つてな」

そう言つて、シヨウマは得意げに笑つてみせた。

第14話 GBNに光る兄弟愛

成瀬家は鳳修大学附属病院から少し離れた街にある。

曾祖父の代からこの地域に根差しており、日本風な木造の屋敷はちよつとした名物スポットだ。

その屋敷の自室に、玲十郎―セレジユはいた。

病院から戻ってから、食事もあり摂らず、こうして自室に閉じこもっている。

と、襖が開いて、母が入ってきた。

「玲十郎、あなたに会いたいって人が来てるわよ？」

「僕に？ こんな時間に誰が……？」

「さあ？ よくわからないけど、ヘルパーのシヨウマだつて言えばわかるつて」

「シヨウマさん?!」

立ち上がったセレジユは玄関へ走り、もの珍しそうに首をめぐらしているシヨウマを見つけた。

「おうセレジユ。夜分に悪い。お前ん家、めっちゃ立派だな」

「ど、どうされたんですか?!」

もう会うこともないと思っていたセレジユは動揺を隠せない。

「こんなところじゃなんだ、中で話そうぜ」

「か、かまいませんけど、それ、僕側の言うセリフでは……」

セレジユの自室に通されたシヨウマは、さつそく部屋の隅に置かれたガンプラが飾られた棚に食いついた。

「おお、いろいろ作ってるなあ。お前キャンディ塗装とかもできるのか。今でこれなら、将来有望だな」

「は、はあ。じゃなくて！ いったいどうされたんです？ わざわざ家にまで来て。と
いかなんで家の場所が？」

「お前の兄貴に教えてもらった」

「えっ……」

「あ、そうそう。忘れないうちに。ほら」

セレジユは手渡された箱を開け、中に入っていたものに驚きの表情を浮かべた。

「《ブラストZガンダム》……!」

「こんな大事なものを、簡単に手放すなよな」

「わざわざ、届けてくれたんですか？　ありがとうございます。でも、これにはもう何の意味も……」

「聞いたよ。そいつのことで兄貴と喧嘩したんだってな」

その一言に、セレジユの顔が曇る。

「はい……。兄さんは、自分の手で、このガンプラを作りたかったらしくて。元気になつてもらおうつもりが、僕、兄さんの楽しみを奪ってしまいました……」

「お前の兄貴の気持ちもわかる。でも、お前は間違ったことはしてないよ」

「そうでしょうか……?」

「ああ。お前の兄貴も、本当はそれをわかってた。だから、もう一度会ってやってくれ。GBNで」

「GBNで……?」

「お前は普段、家庭用の筐体を使ってるって聞いたぜ。机の上のそれだな? 俺もギアを持ってきたんだ。繋がせてもらおうぜ」

鞆からダイバーギアと《キマリスクインス》のガンプラを取り出して、すぐにセレジュの分の準備も終えるシヨウマに、当のセレジュは頭に疑問符を浮かべた。

「でも、兄さんのギアは僕が使つて、アカウントだつて……」

「いいからいいから。ほら、着けた着けた」

「あ、ちよ、ちよつと……！」

半ば無理やりヘッドセットを装着させられ、GBNの世界―《テイメンション》に飛び込むセレジュ。

ログインしてすぐにシヨウマに引つ張られ、フリーエリアへと移動させられることになった。

夜の時間に設定されているフリーエリアでは満点の星が空に輝く。

湖畔に並ぶ《クインス》と《プラスチックZ》。その足元にアバターの姿のシヨウマとセレジュは立っていた。

「あの、こんなところで、いったい何を？」

「そろそろ来る頃だ」

「来る?」

シヨウマの言葉をセレジユが繰り返したとき、ふと後ろからバーニアが唸る音が聞こえた。

二体の《ガンダム》の傍に降り立ったのは、ヴァルクユリア・フレイムを使用する、飾りのような頭部アンテナが特徴の機体。

「青い《グリムゲルデ》?」

「やあ、待たせてしまったかな?」

そう言って降りてきたのは、『鉄血のオルフェンズ』のギャラルホルンの軍服に身を包むダイバーだった。

「いえ、俺たちも今来たところですよ」

「シヨウマさん？ この方って……？」

「ああ。リアルで初めて会ったとき、俺の横にいた人だ。麻玖木先生」

「一応マツキーという名前はがあるが、先生で構わないよ。セレジュ君」

「は、はあ。どうも」

差し出された手を握り、小さく会釈をしたセレジュ。

「それにしても《グリムゲルデ》かあ……。これが、先生のガンプラなんですか？」

少し興奮気味のシヨウマだったが、麻玖木には首を横に振られた。

「いや、メインで使う機体は別にある。これは予備機で、ただの青く塗装した《グリムゲルデ》さ」

「そうですか。まあ、なんとなくそんな気はしてましたけど……」

「さて、それじゃあ本題に入ろうか。そろそろ出てきたまえ」

《グリムゲルテ》のkokopittoから、ごろりと球体のものが落ちてきた。

「わ、わ、わ……つと」

セレジユのそばに転がったのは、オレンジ色の球体、もといハロだった。

「ハロ？ 仮登録のダイバー？」

「よう、玲十ろ……じゃない。セレジユって呼んだほうがいいか」

「その声……！ 兄さんなの!!」

「まあ、な。はは……」

揺れながら耳のパーツを動かすハ口の姿をした兄、隆一郎を抱き上げ、セレジュはシヨウマに視線で説明を要求した。

「先生に頼んで連れてきてもらったんだ。実は先生、病院にダイバーギアを持ち込んでるんだぜ？」

「あくまでリハビリへの応用などの知見を得るための資料として、だがね。遊びで使っているわけじゃない。今回は特別だ。バトルをするわけではないから、片手でも操作はできると判断して彼を連れてきた」

「じゃ、そういうわけだ。俺たちは失礼するぜ。先生、行きましょう」

「ああ」

「あ、ちよ、シヨウマさん!!」

呼び止める間もなく、《クインス》と《グリムゲルデ》を消して離れていくシウマと麻玖木。

「——いい、ガンプラだな」

腕の中のハロが、ぽつりとつぶやいた。視線は《ブラストZ》に向いている。

「兄さん……」

「実物もいんだけど、こうやって実寸大で見ると、それがよくわかる。作るの、大変だったろう？ 構想を練ってた時から大量のBCがいるのはわかってたんだ」

「うん……。対人戦はまだちよつと怖くて、CPU相手のミッションや採取ミッションばかりやってたけどね。でも、最後はシウマさんと、もう一人、親切な人が手伝ってくれたんだ」

「そうか。楽しんでるんだな。GBNを」

そして、沈黙が漂う。それを破ったのは、セレジユの方だった。

「……ごめんなさい。兄さん。僕、兄さんの気も知らないで、勝手に舞い上がって……。本当にごめんなさい」

「違う。悪いのは俺の方だ。お前は俺のためにここまでしてくれたんだ。なのに、突っぱねるような真似をした。俺は最低の兄貴だ」

「そんなことない！ ガンプラのことを教えてくれたのは兄さんだよ！ こんな楽しいことを僕にも教えてくれた！ 最低なんかじゃない！」

「玲十郎……」

セレジユと向かい合ったハロは少し口ごもったが、すぐにはつきりと言葉を紡いだ。

「順番があべこべになったけど、言わせてくれ。ありがとう。今までで一番嬉しいプレ

ゼントだよ」

「よかった……。僕も改めて、誕生日おめでとう、兄さん」

「はは、ありがとうな」

セレジュを見ていたハロが、もう一度《プラストZ》を見上げる。

「玲十郎、頼みがあるんだ。やっぱり、《プラストZ》は正式にお前のものにしてくれないか?」

「ど、どうして?」

「あの先生が教えてくれたんだ。近いうちにGBNにアップデートが入って、こっちで作ったガンブラがリアルでも手に入るようになるって。だから、俺は今度こそ俺だけのガンブラを作る。俺自身の手で! そうしたら、俺と一緒に、GBNをやってくれないか?」

バトルをやるなら義手を付けたリハビリも頑張らないといけないけどな、と苦笑気味に付け加える言葉の途中で、セレジユは感極まってしまった。

「兄さん……！ うん、うん！ やろう！ 一緒に！」

ハロの身体を抱きしめるセレジユ。

木の陰からその一部始終を遠巻きに見ていたシヨウマは、ほっと胸を撫でおろした。

「あの様子だと、大丈夫そうですね」

「まったく、『クインズ』を取りに来たと思ったら、あんな提案をしてくるとは。君もなかなか私をいいように使ってくれるな」

木に背中を預ける麻玖木は、困ったようにかぶりを振った。

『でもよかったね。二人が仲直りできて』

デイスプレイが開き、映る《クインス》から少女の声が出た。

『シヨウマから話を聞いたときは、びつくりしちゃった』

「びつくりしたのはお前のこともだ。あれからどうだ？ どこか変なところはないか？」

『もう、さつきも言ったじゃない。なんともないよ。むしろいい感じ！』

「こう言うんですけど、どう思います？ 先生」

「彼女の言っていることは本当だろう。ガンダムフレームの腕を新しいものに変えて、強度を上げつつ軽量化した。これまでよりも動きがよくなるはずだ」

『ね？ 言ったでしょ？ 先生、ありがとうございます！』

シヨウマは不安を拭いきれなかったが、少女の声と、麻玖木の腕を信じることにした。

「わかった。ともあれ、今回の依頼も無事に達成だ」

「ああ。今はあの兄弟を祝福しよう」

『うんうん！ リアルの私も、きつと友達になりたいと思ってるよ！』

「……ああ。そうだな」

「シヨウマさん！」

ハ口を抱えて手を振るセレジュに、シヨウマは麻玖木と共に歩き出す。

依頼を円満に完了したのだと、自分に言い聞かせながら。

第15話 砂の海を征く者たち

照りつける灼熱の日差し、無辺に広がる砂の海。

人間による行き過ぎた開発によって自然が淘汰された極限の地、それがこの茫漠の砂漠。

そんな環境を模したミッションステージに、爆炎の華が咲いた。

砂の中から爆風にあおられて空に打ち上げられる、ヴェイガンの砂漠戦に長けた局地戦用の機体《ゴメル》。それが三機。

追いかけるように一直線に走ったメガ粒子の閃光が、宙を舞う《ゴメル》たちを貫いた。

「よし！ 作戦通り！」

砂を押しつけて出てきたのは、ジオン公国軍の試作型水陸両用モビルスーツ《ゾック》だ。機体は砂漠に対応した迷彩塗装を施されている。

「《ゴメル》は仕留めたぜ！」

《ゾック》を操縦する筋骨隆々なダイバーが叫ぶ。

「よくやった！ こっちもあと少しだ！」

そう答えたのは、同じ塗装がされた《ゴッグ》。

ザフトの陸専用モビルスーツ《バクウ》の四編隊に囲まれ、ミサイルの集中砲火を浴びているが、機体にはそれらしいダメージはない。

「さすが《ゴッグ》だ。なんともないぜ！ ……おりやあああつ！」

力いっぱい振り回された《ゴッグ》の腕が伸び、先端のクローで一機の《バクウ》を捉えた。剣呑な音を響かせて、他の三機を巻き込みながら地面に叩きつけられる。

「くらえっ！」

跳躍したゴッグが腹部メガ粒子砲を放ち、《バクウ》たちは光の中に消え去った。

「あとはそいつらだけだ！ 姐御！」

「任せな！」

威勢よく吼えたのは、リーダー格の女性ダイバー。搭乗する機体は《ズゴックE》。他の二機と同じカラーだ。

対峙するのは三機の《ディザート・ザク》、そして指揮官機の《ドワツジ改》。

『ガンダムZZ』でガンダムチームと戦ったロンメル隊を模したエネミーである。

「さあ、勝負だよ！」

先に動いたのは《ズゴックE》。

発射された光弾が《ドワツジ改》たちに飛ぶが、四機は散開して避け、ホバーによる機動性を活かしながら女性ダイバーを翻弄していく。

「これならどうだいっ！」

《ズゴックE》の丸みを帯びた頭部から無数のミサイルが飛ぶ。

連続した爆発が起こるが、すぐにこの選択が失敗だったことに気づいた。

「視界が……！ ええい、あたしのドジ！」

砂塵が巻き上がり、視界がほとんどゼロになる。それを突き破ってヒート・ホークを

構えた《デイザート・ザク》が現れた。

「正面!! でも一機だけで!」

再びビーム・カノンを発射しようとしたその時、《デイザート・ザク》の背後から、もう一機の《デイザート・ザク》がザクバズーカをこちらに向けて飛び出した。

「後ろに!! うぐっ……!」

認識した時にはバズーカから放たれた砲弾が左肩に直撃していた。水陸両用モビルスーツだけあつて頑強な装甲は砲火の直撃にも耐えるが、女性ダイバーは衝撃に襲われる。

だが、まだ終わりではなかった。二機目の後ろに、もう一機の《デイザート・ザク》が控えていたのだ。

「ジェットストリーム……!!」

三機の《デイザート・ザク》が、黒い三連星の十八番をやつてのけた。

その事実には驚き、動きを止めてしまった《ズゴックE》が最後尾の《デイザート・ザク》のヒート・ホークの斬撃を受けてしまう。

「ぐあつ！ ま、まだこれくらい！」

体勢を立て直した直後にコクピットに鳴り響く警報。ズゴックEの頭上に、《ドワツジ改》がいた。右手に握るヒート・トマホークがキラリと光る。

直撃を覚悟した瞬間、ヒート・トマホークを握る《ドワツジ改》の右腕が吹き飛んだ。

「危ないところだったな」

警報に割り込んできた通信の声に、女性ダイバーは笑う。

「ああ、助かったよ。ヘルパー！」

砂漠を滑るように飛ぶウエイブライダー形態の《ブラストZガンダム》に乗った、《ガンダム・キマリスクインス》。

《ドワツジ改》の右腕を砕いたのは、ドリルランスから撃った《ダインスレイヴ》だった。

「俺たちは《ザク》をやる。アンタは目の前の相手に集中してくれ！」

「恩に着るよ！ たああつ！」

片腕を失った《ドワツジ改》に《ズゴックE》が格闘戦を仕掛けていく。

「セレジユ、やるぞ！」

「はい！ ショウマさん！」

《クインス》が高く飛び上がったのを確認し、《ブラストZ》が人型に戻る。同時にビームライフルで《ディザート・ザク》を牽制。《クインス》の攻撃の隙を作った。

「おおおっ！」

ドリルランスで頭を叩き潰された《ディザート・ザク》が小さな爆発を起こして砂に沈む。

残りの二機はそれぞれ《クインス》と《ブラストZ》を相手取るが、二体のガンダムの猛攻が待っていた。

「砂地は足を取られやすい……。だから、着地を最小限にしてっ！」

舞うように砂漠を飛ぶ《ブラストZ》に、バズーカの照準を定められないモノ・アイが、飛来したビームサーベルに貫かれる。

「これでっ！」

サーベルの柄を握った《ブラストZ》が、そのままザクを両断した。

「セレジュのやつ、また上達してるな」

『シヨウマが師匠をやってるおかげだね』

コクピットで聞こえる少女の声に鼻を鳴らして、シヨウマは《デイザート・ザク》の最後の一機を睨んだ。

「俺たちも行くぞっ！」

『うん！』

《クインス》のマシガンガンの斉射を躲し、ホバーを最大限に稼働させて砂漠を駆ける《デイザート・ザク》。

『流星は砂漠特化型。さっきまで相手してた《ヒルドルブ》より速いね』

「ああ。でも、俺たちの方がもつと速い！」

ドリルランスを捨てて身軽になった《クインス》が、刀を握って《デザイナー・ザク》に急接近する。

「はあっ！」

振り下ろされる斬撃は、紙一重で避けられた。しかし、それもショウマの想定内。

「足の良さが、命取りだ！」

地面に埋もれた刀を支えにして、機体を捻った《クインス》。膝から飛び出した回転式パイルバンカーが《デザイナー・ザク》の胴体を背中から穿ち抜いた。

「お見事です！ ショウマさん！」

撃墜を確認したセレジユが快哉を上げる。

「これくらいはな。さて、あつちは……」

《ズゴックE》と《ドワツジ改》の戦いも佳境であった。

片腕でヒートサーベルを振るう《ドワツジ改》に対して、《ズゴックE》はほぼ無傷。勝負は見えていた。

「こいつで、しまいだあつ！」

バイス・クロウが《ドワツジ改》の胸部装甲を貫く。

ゆっくりと仰向けに倒れていく赤銅色の機体は、背中が地面に触れると同時に爆発した。

ミツシヨンクリアの表示が空に現れ、ファンファーレが鳴り響く。

負けないくらい大きな歓声に、セレジユは緊張を解いたのだった。



「はっはっは！ やー、本当にあんがとねえ！ アンタらのおかげだよ！」

岩陰に五機のモビルスーツが並び、その足元に設置されたテントで上機嫌で笑う海賊めいた服装の女性ダイバー。

「クリア報酬のアイテム、こいつが欲しかったんだ！ これでアタシたちはまた強くなるよ。ほい、こいつが今回の依頼の礼だ」

送られきたBCの額に、シヨウマは片眉を上げる。

「……指定より多いぞ？」

「いいんだ、いいんだ！　気持ちだよ。何も言わずに受け取っとくれ」

その気立ての良さに、シヨウマも思わず笑みを浮かべた。

「喜んでもらえて何よりだ。こっちも面白いガンプラを見せてもらったよ」

「砂漠での戦い、いい経験になりました！」

シヨウマの隣に立つセレジユも頭部の羽を動かしながら元気いっぱいと言う。

「にしても、驚いたね。いつの間にヘルパーは二人になったんだい？　それもこんな可愛い坊やなんてさ」

女性ダイバーに顔を近づけられ、背筋を伸ばすセレジユ。女性ダイバーの後ろでは、筋骨隆々の海の男チックなダイバー二人がニヤニヤしている。

「出たよ、姐御の悪い癖だ」

「坊主、気いつけな。その人、守備範囲広いぜ？」

「しゅ、しゅびつ？」

「お前ら！ ふざけたこと言ってるんじゃないよ！ つたく……。うちのフォースにも、もう少し見た目の若い子が入ってくれりやねえ」

一喝した女性ダイバーは、やれやれと肩を落とす。

「フォース『マッドネスアングラー』だったか？ 加入者募集の掲示板にあったけど、まだ足りないのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどねえ。せつかくなら、同好の士つてやつは増やしたいじゃないか」

「め、珍しいですよ。水陸両用モバイルスーツであらゆるエリア環境に挑むフォースつて」

シヨウマの背に隠れながら、セレジユは掲示板に書かれていたフォースの概要を思い出す。

「物好きだろ？でもGBNでなら、アタシやあいつらみたいなの好きも集まるんだ。最高だよ。GBNは」

《ズゴックE》を誇らしげに見上げる彼女に、シヨウマは同意と尊敬を覚えながら拳を突き出した。

「わかりきってるけど、依頼達成の証明なんぞな。GBNは、楽しいか？」

「へっ……あつたりまえよ！」

二つの拳が小さく音を立てて打ち合った。

第16話 ソレが彼女のやり方

中央受付に戻ったショウマとセレジユは、カフェのようなレストスペースで身体を休めていた。

「はあく、再現とは言え、砂漠の暑さはすごいですね。こっちはとつても涼しいです」

「GBNあるあるだな。ミツシオン環境の変化に酔うダイバーもいるんだぜ。ところで、今日はまだこっちに居ていいのか？」

リアルでの《ブラストZ》をめぐる兄との確執が解決してからというもの、セレジユはショウマについて回るようになった。

はじめはショウマも離れるように言っていたが、意志が強い、というよりも頑固なセレジユに根負けし、様々な条件付きで彼をヘルパー見習いとして同行させることにした。

「はい！ 今日塾はお休みで、学校の宿題も終わらせてから来ました！ まだまだGNができますよ。条件その一、『リアルでの生活をおろそかにしない』はしっかり守っています！」

「お、おお……。ならいいんだ。うん。でも、お母さんに戻るよう言われたら、ちゃんと戻るんだぞ？」

「わかってます。でも、母さんもシヨウマさんのことはわかってきていますし、多少の融通は利きますよ」

成瀬家に乗り込んだシヨウマは兄弟の仲直りを見届けたあと、リアルに戻ってきたシヨウマは、セレジユの母に事の顛末を話すことになった。

セレジユの母は最初こそ困惑していたが、兄弟の仲を取り持ってくれたとわかるとシヨウマをいたく気に入り、シヨウマにGNでのセレジユの保護者を任せただ。

「家族公認ですから、いつでもまた家に来てくださいいね？ 夕飯とか、ご馳走しますよ」

「はは、そいつは助かる。俺、一人暮らしだし」

曖昧に笑ったシヨウマは、（家まで行つたのが運の尽きだったな……）と自らをなじつた。

と、二人の近くに立っていた大きな柱時計から、時報のベルが鳴った。

「あ、そろそろ時間ですね」

「とうとう来たか、この時が……」

シヨウマは憂鬱そうにうなだれる。何を隠そう、今日はユーコの取材を改めて受ける日なのだ。

「集合場所はここのはずですけど、来ませんね。ユーコさん」

「どうせ前の取材が押ししてんだろ。いつそ来てくれないならそれはそれでありなんだが……」

背もたれに身体を預けたシヨウマは、上下が逆さまになった視界でその願いが儚く散るのを目の当たりにした。

「来ちゃったか……」

「会うなり嫌そうな顔すんの、やめてもらえないかしら」

金色の髪を揺らしてシヨウマの前に立ったユーコは、三白眼でぼやいた。

「ユーコさん、こんにちは」

「やつほーセレジュ君。本当にこいつと一緒なのね」

セレジユの隣に座ったユーコに、姿勢を戻したショウマが心底やる気がない目を向ける。

「んで、何が聞きたいんだ？ さっさと始めようぜ」

「はやく終わらせたいっていうのがピンピンに伝わってくるわ。ちよつと待ちなさい。準備があるんだから」

ユーコはテーブルに手のひら大の初代《ガンダム》の頭部を置いた。

「え、なんですか、これ？」

「ボイスレコーダーよ。ほら、ここを押すと……」

ユーコの指が《ガンダム》の左の側頭部を押すと、右の側頭部からマイクがせり出てきた。

「わあ、すごい！」

「またマイナーなもんを……」

興味津々なセレジュに対し、シヨウマはこんなアイテムを実装するGBN運営の手広さに舌を巻く。

「それじゃあ、はじめましょうか。話題のヘルパー、シヨウマへの独占インタビュー！」
ユーコの声を合図に録音を開始した《ガンダム》の目が光り、インタビューが始まった。



「……とまあ、そんなわけで俺はこれからもGBNを陰ながら支えていくよ。どうだ？
これで満足か？」

インタビュー開始から一時間。やりきった顔でシヨウマはユーコに問いかけた。

「そうね。こつちが用意した質問は今ので終わりよ。どうもありがとう」

ボイスレコーダーを切ったユーコは、ふう、と肩の力を抜いた。

「意外でした。シヨウマさんが初心者狩りに遭ってたなんて」

一部始終を見守っていたセレジュも、ずっと言いたかった言葉をようやく口にできた。

「俺だって最初は初心者だ。駆け出しの頃はろくに戦えもしなかったさ」

「で、通りすがりのダイバーに助けてもらって、それに憧れてヘルパーを始めた、と。割と普通な理由だったわねえー」

「何を期待してたんだよ……」

「私としてはもつところ『実はGBN運営の関係者だった!』とかが欲しかったんだけど」

「そんなわけないだろ」

質問リストを表示するディスプレイを流し見するユーコに、シヨウマは呆れ顔を作る。

「鉄血系の機体を使ってるのもビームに強いからって理由なんでしょ? そこも普通っていうか、つまんなかったわ」

「なんだなんだ、さつきから。せっかく答えてやったのに文句ばかりで。どうせ俺はキョウヤみたいなGBNへの熱い思い入れは語れねえよ。ふん!」

「あ、シヨウマさんが拗ねちゃいました」

「ふふふ。あの記事、読んでくれたのね。ありがとう」

「もういいよな？　これでお前との関係も清算だ」

「ああ、待つて待つて！」

シヨウマが椅子から立とうとすると、ユーコは身を乗り出してそれを引き留めた。

「な、なんだよ。まだ何かあるのか？」

「写真の方が足りないの。あなたが『クインズ』を動かしてヘルパー活動をしている写真が欲しいのよ」

「は？　それならこの間の限定ミッションのがあるだろ？」

「いやあ、それがね、限定ミッションの時の写真、ブレイクデカールに注意をよびかける特集記事に使うことになって。全部のデータが編集部に持ってかれちゃったのよ。だ

からまた撮らないといけないの」

「ええ……」

「だから次のヘルパーの依頼があつたら是非同行させてほしいなあ、なんて。ある？
このあとすぐとかにあつたりするっ？」

ぐいぐいと詰め寄ってくるユーコに辟易しつつ、シヨウマは頭の中で今日の依頼スケジュールを思い出した。

「あるにはあるけど……。依頼人の許可も取れよ？」

「やった！ あるのね！ 大丈夫よ、こちらら天下のGBジャーナルなんだから！
断ってきたらセンテンスサテライトキャノンよ！」

「お前、本当にジャーナリストとしてどうなんだ……？」

「あ、あはは……」

「さ、そうと決まれば行きましょう！」

シヨウマを引つ張りながら、行先を知らないはずのユーコが一番張り切つてエリアゲートへと向かつていく。

「お、おいおい、引つ張るなよ……！」

「ま、待つてくさい！ 僕も行きますから！」

二人を追いかけて走るセレジユは、自分たちの状況を俯瞰して、小さく笑った。

「なんだか今の僕たち、本物のフォースみたいだなあ」

第17話 ユーコと牛

うららかな日差しを浴びながら草原を滑る風が、花の香りを連れて空へと舞い上がっていく。

GBNの中ではあらゆる季節、気候が再現されるため、ダイバーたちは戦いの興奮だけでなく、安らぎの時間さえも享受することができる。

「気持ちいい所ですねえ」

「ああ。うっかり居眠り操縦、なんてことになるなよ?」

「あはは、さすがに僕でもそんなことはしませんよ」

前を歩く《クインズ》と《プラストZ》の中で、シヨウマとセレジュが暢気な会話を繰り返す。

「むー……」

しかし、《インサイトフレーム》のユーコだけは不満そうな顔つきだった。

「どうした、ユーコ。依頼人から同行の許可がもらえたつてのに、浮かない顔だな」

「許可をもらえたのはありがたいわ。ありがたいけど……！」

コクピットに映ったシヨウマの顔に応えつつ、操縦桿を握りしめ、ぐぐぐ、と身体に力を溜める。そして叫びとともに一気に解放した。

「なんでよりによって牛運びなのよ！」

ユーコの憤慨した声が澄み切った空にほどけていく。

シヨウマがユーコの取材の後に予定していた依頼は、『∀ガンダム』の劇中のワンシー

ンを再現した、物資運搬ミッションのヘルプであった。

「地味すぎるわよ！ 私は派手に戦ってる写真が欲しかったの！ なんて武器の使用ができないミッションなのよ！」

かなり身勝手な怒り方にシヨウマは少しげんなりとした顔つきになる。

「依頼内容を聞かないでついてくるのが悪いんだろ……」

「やあ、悪いねえ。GBジャーナルさんの取材があるって知っていたら、もっと別のミッションを選んだんだけどねえ」

そう言って通信に割り込んできたのは、今回の依頼人であるダイバー。同作の登場人物のウィル・ゲームに似た風貌で、登場するガンプラも《キャノン・イルフト》だ。その両手は5頭の牛が乗っている。

「いや、あんたは気にしないでくれ。あいつの自業自得だ」

半笑いで、明らかにこちらをコケにしているシヨウマの声に、ますますユーコは顔を紅潮させる。

「ぐぬぬぬ……!」

「ユーコさん、そう気を落とさないでください。すごい写真なら今がチャンスじゃないですか」

「セレジユくん? どういうこと?」

「僕の《プラスト乙》じゃあ、どう頑張っても一度に運ぶのは4頭が限界ですけど、シヨウマさんの《クインス》を見てください」

セレジユが示す《クインス》は、両手だけでなく背面に装備したシールドも巧に操り、一気に10頭の牛を運んでいた。

「ね？　十分すごいと思いませんか？　あれって、かなりのテクニクが必要ですよ」

「純粹すぎて怒鳴る気にもなれないわ……。まあ、一応撮っておきましょうか」

一行の中で唯一、牛も豚も運んでいない《インサイトフレーム》がバーニアを使って跳躍し先頭に出る。そして右手に携行したガンカメラで写真を撮った。

「統一感のない画だわ。牛を運んでるのもなんかシユールだし……」

縦に並びながら牛を運ぶ三機のモバイルスーツの写真に、ユーコは記事で使えるか本気で悩んでしまう。

「ハハ、いいじゃないか。今のお前、フラン・ドールみたいだぞ」

「あんまり嬉しくない！」

そして、50頭の牛を制限時間内に運ぶミッションは、あつという間に終わった。

「ありがとう。ウィルゲムデザインフォースネストを手に入れるには、どうしてもこのミツシオンを短時間でクリアしないといけなかったんだ」

報酬を支払いながら、今回の依頼の目的を口にするダイバー。

「力になれて何よりだ。こつちこそ、突然あんなのを連れてきて悪かった」

シヨウマが『あんなの』と言ったのは、『インサイトフレーム』の足元で口を尖らせながら撮影した写真を確認するユーコである。

「ハハハ。本人には気の毒だったけどね。僕が頼める義理じゃないけど、次の依頼にも連れて行ってあげたらどうだい？ 噂のヘルパーだ。依頼は山とあるんだろう？」

「まだ依頼があるのっ!？」

耳ざとかったユーコが、M・E・P・Eもかくやという素早さで一気にシヨウマの傍

に立った。

「うおつ、聞こえてたのかよ……」

「次の依頼も同行させて！ これじゃあアンタの記事がいつまで経ってもできないわよ！」

「わかった。わかったってば。セレジュ、お前は どうする？」

牛を撫でていたセレジュは呼びかけに振り返り、シヨウマのもとへと馳せる。

「もちろんご一緒します！ 次の依頼はなんですか？」

「そう！ そこが重要よ！」

二人から期待と懇願の眼差しを向けられ、シヨウマはふふんと得意げに笑う。

「喜べユーコ。次の依頼は、お前好みの絵が取れそうなバトルルミッションだ」

その言葉に、ユーコの表情は一気に華やぐのだった。

第18話 桃色の衝撃

無辺の宇宙空間にぽつんと浮かぶ白銀の巨大なモニユメント。

それは『ガンダムW』の世界に存在するコロニー……をモチーフにしたミツシヨンエントランスである。

物資運搬ミツシヨンの依頼を終えたシヨウマ達は、次なる依頼の場へと赴いていた。「ウイング！ いいわね！ この世界観で宇宙なら、そうそうトンチキなミツシヨンじゃないはずよ！」

窓に張りつき、小惑星帯を見るユーコは期待に目を輝かせている。

「あはは……。ユーコさん、目の色が変わってますね」

苦笑するセレジユの隣で、シヨウマは「うーむ」と唸る。

「シヨウマさん？ どうしました？」

「いや、依頼人がいないんだ」

「え？ 来てないんですか？」

「ああ。先にこっちで待ってるって話だったんだが……」

きよろきよると周囲を見渡すシヨウマとセレジユのもとへ、ユーコが戻ってくる。

「ちよつと、肝心の依頼人はどうしたのよ」

「いや、だから——」

「せんばあ〜い！」

シヨウマが言いかけたとき、フロアに響くような大きな声が三人に飛んできた。

「げ……！」

三人同時に振り向いて、波面を作ったのはユーコだった。

「先輩じゃないですかあ！ 奇遇ですねえ！」

手を振りながらこちらへ駆けてくる一人の女性ダイバー。

（どギツイ。流星号か）

そんな言葉がシヨウマの脳裏に浮かぶほど、全身の衣装をピンクにしている。

（なんだか破廉恥だ！）

そんな言葉がセレジュの脳裏に浮かぶほど、身体のラインを強調する服装だった。

「こつちで直接会うのは初めてですねえ〜！」

「え、ええ。そうね」

合流とともにノータイムで会話に入った女性ダイバーに、ユーコは顔を引きつらせな

がら対応する。

「知り合いか？」

「まあね。私の後輩」

「後輩？　　つてことは、GBジャーナルの……」

「クルミっていいまあす！　　はじめまして、シヨウマさん！」

両手を握ってブンブンと激しく揺らすクルミに、シヨウマは怪訝な表情になる。

「どうして俺の名前を？」

「そりゃあ、有名人ですしい、私も興味あつたりい？　　みたいなあ？」

淡いクリーム色からグラデーションになっていくピンク色の毛先を指でいじるクルミ。ますます戸惑ったシヨウマは、ユーコを睨んだ。

「ユーコ、お前が呼んだのか？」

「まさか。あんたは私が単独で追ってるネタなんだから」

「そおですよ。私は自分の記事のしゅ・ぎ・い。こおいう企画で！」

押しつけられるように見せられたディスプレイには、鮮やかなでポップなフォントの文字が躍っていた。

「なにになに……モノ・愛ガールズ？」

「モノ・アイ系の機体を使う女性ダイバーを取材してるんです。可愛いですよねえ、モノ・アイ！　　くりくりつとしてるところとか！」

「へえ、SD系を可愛いっていうのはよく聞くけど、モノ・アイか」

「やっぱり、《ザク》とか《グフ》とかですか？」

セレジユの問いに、クルミは彼と視線を合わせるように身をかがめて答えた。

「もちろんそういうのもアリだけども、《バウンド・ドッグ》とかもステキでしたよお」

「そ、そうですか……！」

急接近してきた女性の顔に、思わず赤らめた顔を逸らしてしまう。

ユークが咳払いをして、一同の注目を集める。

「じゃあクルミ、あなたは私たちとは関係ないわけね？ なら、邪魔しないでくれる？」

私もあなたの邪魔しないから」

「あはあ、先輩こわあ〜い。で・もお、私の取材相手の方があ、関係あるみたいでしてえ」

「そのとーりっ！」

甲高い靴音を鳴らして現れたのは、ネオ・ジオンの制服に袖を通した、これまた女性ダイバー。しかし容姿が幼い。セレジユとそう大差はなかった。

「待たせたわねヘルパー！ その記者さんの取材が長引いたわ！ ごめんなさい！」

尊大なのか礼儀正しいのかよくわからない口調で登場した少女の発言に、シヨウマは得心いった。

「あんたが依頼人か」

「マリツカよ！ よろしく！」

「シヨウマだ。よろしく頼む」

握手を交わしたあと、シヨウマはクルミの方へと顔を向けた。

「なるほどな。あんたの取材相手が、俺の依頼人だったわけだ」

「そおいうことですよ。取材の終わり際にこのあとのことを聞いて、せつかくならご一緒したいなあ、なんて」

すり寄ってくるクルミから一步後退し、シヨウマは依頼人のマリツカへ声をかけた。

「マリツカ、実は俺を取材してるこのGBジャーナルの記者が、俺がバトルミツシヨンのヘルパーをしてるところを撮りたいって言うんだ。急な話で悪いんだが、付き合わせていいか？ 邪魔はしない。写真を撮るだけだ」

会釈したユーコを見て、マリツカは鷹揚に頷いた。

「別にいいわよ。さっきのついでなもの。好きになさいな」

「ありがとう！ これでやっとまともな記事になるわ！」

シヨウマを押しつけてマリツカの手を握るユーコ。セレジュに支えられたシヨウマが文句を言うより先に、マリツカがミツシヨンステージへの入り口を指さした。

「役者は揃ったわね！ さあ、私についてきなさい！」



宇宙に浮かぶコロニーから飛び出す、四つの光。

シヨウマの《キマリスクインス》、セレジユの《プラストZ》、ユーコの《インサイト
フレーム》だ。

「わあ、みなさあん、待つてくださあ〜い！」

そして、三機の《ガンダム》の後ろに、ころころとしたフォルムの機体がやや遅れ気
味で続く。

「SDの《キュベレイ》……」

「クルミさんですね。《貂蟬キュベレイ》をベースにしているようです」

シヨウマとセレジユがモニターに映る鮮やかなピンクの機体に意識を向ける。

「なあにが『待つてくださあ〜い』よ。ふんっ」

ユーコだけはつまらなそうに鼻を鳴らした。

「みなさん速いですう。私の《フェアリーキュベレイ》じゃ追いつくのがやっとです
よお」

「まあ、多少の機動性の差は仕方ないな。そこをカバーするのがビルダーとしての腕の
見せ所だけど」

「えーん、シヨウマさんが厳しい！ 私だつて頑張つて作つたのにー！」

「え、俺そんな厳しいこと言つたか……？」

調子が狂わされそうになるシヨウマ。と、《クインス》の横を飛んでいた《プラストZ》

がウエイブライダーへと変形し、減速しつつ《フェアリーキューベレイ》の下についた。「良ければ乗ってください。そうすれば置いて行かれずに済みますよ」

「いいのお!! セレジュくんありがとお! それじゃあお言葉に甘えてえ、えいつ」

コクピットで感じたわずかな揺れでセレジュは《フェアリーキューベレイ》が乗ったのを認識し、再びショウマたちとスピードを合わせた。

隣に戻ってきた《プラスチックZ》に乗る《フェアリーキューベレイ》がSDならではの笑顔を見せながら手を振ってくるのを横目に、ショウマは依頼人の姿がまた見えないことを考えた。

「マリツカはどこだ?」

『ショウマ、上!』

コクピットに響いた声に弾かれるように見上げると、ショウマの真上を二機の戦闘機が通り過ぎて行った。

「まさか、あれか?」

「そのとおりっ!」

その声とともに、急上昇した二機の戦闘機は、それぞれに変形を開始した。

後ろを飛ぶ戦闘機は機体を伸長させてモビルスーツの下半身のようになる。

前に行く戦闘機はシールドとライフルを分離させ、バーニアから変形した腕でそれを

掴むと、長いトサカが特徴的な頭部でモノ・アイを輝かせる、モビルスーツの上半身へと変わった。

そして二機が合体。モビルスーツ《バウ》をベースにした機体となった。

「あつはつはー！ どう！ 劇的な登場でしょ！」

元気いっぱいな笑い声と共に、青い《バウ》はマリツカがするように腰に手をおいて胸を張る。

「これが私の《ジャムル・バウ》！ 驚いたかしら!!」

一行に加わったマリツカが感想を求めてくる。シヨウマは純粋な驚きをもって言葉を紡いだ。

「ああ。モノアイだとは思っていたが、バウは予想外だ。しかも、ナッターに《ジャムル・フィン》の意匠が見えた。火力も高そうだ」

「んふふふ！ そうでしょそうでしょ！ 作った甲斐があるってもんよー」

そこで、五機のコクピットに同時にアラートが鳴り響いた。

「どうやら、ミッシェンステージに入ったみたいね」

ユーコの言葉通り、ミッシェン開始の表示が現れ、レーダーが前方に100の反応をキャッチする。そのすべてが輸送艦だ。

「来るぞ、モビルドール軍団だ！」

輸送艦から一斉に飛び出す、無数の機影。

それは『ガンダムW』に登場する究極の機械兵団。戦争を冒瀆する鉄の人形たち。

「《ビルゴ》に《ビルゴⅡ》、《ビルゴ・》まで……！」

「《メリクリウス》に《ヴァイエイト》もいますよお！ それもあんなにいっぱいあい！」

セレジュとクルミがこちらへ殺到する機体たちの名を口にする。

「『モビルドール五百機組み手』……。このミッションをクリアしないと、次のミッションに進めなくてね。私は基本ソコなんだけど、こればかりは難しくて」

「なるほど、それで俺の出番ってわけか」

マリツカの言葉に得心いって、シヨウマは《クインス》にドリルランスを構えさせる。

「ユーゴ、ちゃんと撮ってくれよ」

「オーライ。しっかり戦ってちょうだいね」

すでに《アルミュレ・リュミエール》も展開して準備万端の《インサイトフレーム》がガンカメラを上下させる。

「セレジュ、今度の依頼は少しハードだが、ついてこれるか？」

「は、はいっ！ ついていきます！ 頑張ります！」

「いい返事だ。じゃあ——」

「ああー！ 待って待って！」

出撃直前、耳をつんざいた声に思わず一同は機体をつんのめらせる。声を上げたのはクルミだった。

「セレジユくん、私降ります、降りまあす！」

言いながら、《フェアリーキュベレイ》が蹴るようにして《ブラストZ》から離れる。「く、クルミさんも戦われないんですね？」

「私も撮影ですの！ ファンネル！」

《フェアリーキュベレイ》が射出したのは、ろう斗のような形のファンネル、のようなカメラ。砲口はレンズになっていた。

「先輩のカメラより、いろんな画角でいろんなものが撮れますよお」

「あらあら、そんな大口叩いて平気なの？ シャッターの切り方が難しくしてしよつちゅうブレブレの写真を撮るくせに」

「先輩！ 意地悪なこと言わないでください！ あ、みなさん！ 敵が来ますよ！」

「あんたが引き留めたんでしようが！ ああもう、行くわよっ！」

痺れを切らした《ジャムル・バウ》がモビルドールの群れに呐喊する。

「ま、待つてくださいい！」

それにつられて《ブラストZ》も動き出す。

『シヨウマ、号令、取られちゃったね』

取り残されたショウマは、少女の声にため息をついてからすぐに真剣な顔になって、レバーを握る手に力を込めた。

「さあ、俺たちも行くぞ！」

『うんっ！』

ツインアイを輝かせ、悪魔の名を持つ《ガンダム》が遅ればせながら戦場へと飛び込んだ。

第19話 暴かれる光

今回の依頼である『モビルドール五百機組手』は、間違いなく高難易度のミッションだ。

《ビルゴ》たちの持つプラネイト・ディフェンサーは、実弾はもちろんのこと、生半な威力のビームも弾いてしまう。

そこにビームカノンをはじめとする強力な武装も合わさり、ある程度の腕と適切な武器がなければクリアは難しい。

だが、裏を返せば、その二つが揃えばクリアできる可能性は十分にあるのだ。

「これで……トドメだっ！」

ドリルランスが《ビルゴII》の頭部を叩き潰す。

ショウマの駆る《キマリスクインス》の撃墜スコアは既に二百を超えていた。

「ふう、こんだけ倒せばあとは楽勝だな」

『モビルドールには、私たち相性がいいもんね』

「セレジユも頑張ってくれてる。あいつ、本当に腕を上げてるぜ」

少し離れた位置で戦う《プラストZ》に、セレジユの成長の速さを感じるショウマ。

『あのマリツカつて人もすごいよね。《ビルゴ》の防御を突き破るビームが撃てるんだもの』

少女の声は合体と変形を繰り返して、トリツキーな機動から豪快な一撃を放つマリツカの《ジャムル・パウ》を称賛していた。

「あつはつはー！ チャージの隙を突かれていた今までの私だと思ふなー！」

縦横無尽に宇宙を飛ぶ青い機体から、そんな声が聞こえた。

「確かに、ソロプレイじゃあこの数を捌くのは酷だよな」

『だからシヨウマを呼んだんだね』

「さて、残りもチャツチャと片付けるか！」

『うん！』

まだまだ残っているモビルドールたちに《クインス》が仕掛けていく。

その様子をエリア外から撮影する二機のガンプラがいた。

ユーコの《インサイトフレーム》とクルミの《フェアリーキュベレイ》だ。

「いいわよシヨウマ！ そのままガンガンやっちゃって！」

水を得た魚のようにガンカメラのシャッターを切りまくるユーコ。さまざまなアングルから撮られた《クインス》の写真はすでかなりの枚数になっていた。

「すごいですねえ、シヨウマさん。私のフォトファンネルじゃ追いきれませぬよお」

カメラ機能を搭載したファンネル《フォトファンネル》を動かすクルミは、《ジャムル・バウ》を追いつつ、シヨウマの動きも注目している。

「で・もお、私としてはあ、マリツカさんがシヨウマさんを助ける、もちつもたれつ？」

「みたいいな？ モノアイの機体が頑張ってる画が欲しいんですよねえ」

「何言ってるの。シヨウマがメインなんだから、シヨウマが活躍してなんぼでしょうが！」

「あれえ？ 先輩、そんなこと言っているんですか？」

《インサイト》のkokopittのモニターに、クルミのにやついた顔が映る。

「な、なによ」

「私もお、仕事なんでえ、ちゃんとした写真が取れないと編集長に怒られちゃいますう。

それに、私が仕事できなくて怒られるのってえ、先輩ですよねえ？ この意味、わかり

ますよねえ？」

「ぬぐ……っ！」

何か言いたげなユーコだったが、操縦桿を握る手に力を籠めて、シヨウマに通信を飛ばした。

「ちよつとシヨウマ！ 私の後輩がアンタのピンチが見たいらしいの！ 勝ちながら負けてくれないかしら！」

「無茶言うなっ！」

通信越しの声に吠えるのと、アラームが鳴り響くのは同時だった。

『シヨウマ！ 熱源多数！ ビームの集中砲火だよ！』

「な——うおおおっ！」

残る数十機の《ビルゴ》たちの一斉射撃を受け、シヨウマの視界が爆光に塗り潰された。

ビームの威力を減衰させるナノラミネート装甲とはいえ、その数に押されて《クインス》の動きが封じられる。

「こ、な、く……そおっ！」

シールドを振り上げ、ビームを霧散させる。

「つたく、あいつら、邪魔しやがって……！」

『シヨウマ、まだ来る！』

少女の声の通り、大型のビームサーベルを突きของ構えで携えた多数の《メリクリウス》が《クインス》へ肉迫していた。

「チッ！ 次から次へと！」

「シヨウマさんっ！」

直撃の寸前、ウェイブライダー形態の《プラスチックZ》が部分的に変形させた右腕で《ク

インス》を掴んで離脱した。

「セレジュか！ 助かった！」

「このまま距離を取って、一網打尽にします！」

再度モビルスーツ形態へと変形した《プラストZ》が、背面のフライングアーマーを分離させ、大剣の柄を形作る。

そのツインアイが輝き、それに呼応するように巨大なビームサーベルが姿を現した。

「ハイ・メガ……ブレエエエエドツ！」

振り下ろされた光の剣が、モビルドールたちを飲み込んでいく。大輪の炎の華が咲き乱れ、モビルドールはまた大幅に数を減らした。

「いいぞ、セレジュ。完成した《プラストZ》をよく使いこなせてる」

「ありがとうございます！ ショウマさんの指導のおかげです！」

敬愛するショウマからの誉め言葉に、セレジュは頭の羽を動かしながら元気に答える。

「そう言われると、なんだかこっちが照れるぜ。……ゴホン、最後まで気は抜くなよ！」

「はいっ！」

二人は頷きあい、マリツカが単独で引き付けていた残りのモビルドール群へ向かっていく。

ミッションクリアのファンファーレが鳴り響くのは、そう時間はかからなかった。



「助かったわ！ ヘルパーの看板に偽りはないわね！」

クリア報酬を確認して、満面の笑顔を見せるマリツカ。

「役に立てたなら何よりだ。また手伝ってほしいミッションが出たら、連絡してくれ。順番はあるけどな」

「安心しなさい！ 今回のミッションを超えればあとはどうとでもなるわ！ でも、無理だったらすぐ呼んであげるから！」

「ほんと、自信があるのかないのかわかんないやつだな……。で、そっちはどうなんだ、ユーコ」

振り向いたシヨウマは、今しがた終えたばかりのミッション中に撮った写真を確認するユーコに声をかけた。

「ええ！ ばつちりよ！ これでようやくまともな記事を書けるわ」

「てことは、お前とはここでお別れだな。やっと解放されるぜ」

その言葉を聞いて、ユーコは笑顔から少し怒った表情になる

「なによ、その言い方。言つとくけど、まだあんたの噂のこと、諦めたわけじゃないから」「ちよつと待て!! 話が違うぞ! この記事が書けたらもう付きまとわないんじゃないのかよ!」

「誰がそんなこと言ったのよ!」

「ま、まあまあお二人とも」

睨み合うシヨウマとユーコの間に、セレジユが割って入った。

「いいじゃないですか。仕事とかは抜きにして、たまには一緒にGBNで遊びましょうよ」

「つつてもなあ……」

「セレジユくんの言う通りですよお」

シヨウマが反論しようとした矢先。クルミがセレジユに加勢した。

「先輩つてえ、落ち目だから会社に仲いい人いないしい、お二人が仲良くしてくれたりあ、私としても嬉しいなあつて思うんですよ」

「落ち目? どういうことだ?」

「先輩はあ、本当は芸能部でバリバリだったんですけどお、ちよおちよおヤバイネタを踏んでえ、GBジャーナルにトバされたんですう。あつはは! うけるう」

「ちよつと! 余計なこと言つてんじゃないの!」

ユーコがクルミに掴みかかり、口を塞ぎにかかる。

「シヨウマ、セレジユくん！ 私たちはこれで失礼するわ！ ほら、行くわよクルミ！
じゃあね！」

「ああん、先輩暴力はいけないですよ〜」

そのままクルミを引きずって、ユーコは去っていった。

「……なんか、慌ただしかったな」

「ユーコさんも大変なんですね。なにがあっただんでしょう。ヤバイネタって」

「さてな。まあ、気にはなるが」

シヨウマとセレジユはクルミの言っていた内容が気になりになっている。

「記事が出来上がるのが楽しみね！」

だが、マリツカだけは特に気にしている様子はなかった。



セレジユとも別れて一人になったシヨウマは、星空が広がるフリーエリアへと足を運んだ。湖畔の草原に腰を下ろし、今日のミツシヨンの内容とその報酬のチェックをおこなっている。

「ひーふーみ……っと。よし、あとは先生に報告するだけだな」

ディスプレイを閉じて大きく伸びをすると、入れ替わるようにして、《クインス》の顔が映る小さなディスプレイが現れた。

『お疲れ様。今日もよく頑張ったね』

「お前もな。しかし、今日は後半が特に忙しかったな」

『ふふ、GBジャーナルの取材が来るなんて、シヨウマもすっかり有名人だね』

「ユーゴがあのまま俺の言ったことを鵜呑みしてくれるといいんだが。いろいろ探られると困るのは先生だし」

『うん。嘘をつくのは、ちょっと申し訳なかったね』

少女の声に、シヨウマは薄く笑うほかない。

「正直に話したところで信じられないだろうさ。セレジュもな。あいつらは、俺をただのヘルパーだと思ってってくれてる。それは大切にしたいんだ。こっちの事情に巻き込むようなことはしたくない」

『でも……』

「ん？」

『でも、なんだか最近のシヨウマ、前より楽しそう』

「そうか？」

『うん。セレジユくんとか、ユーコさんと一緒だからかな』

「付きまとわれて大変なんだぜ？ セレジユに情けないところは見せられないしさ」

文句を言いながらもシヨウマの顔は笑っている。

『私はシヨウマもGBNでもつと友達を作ればいいのになつて、ずっと思ってたよ。だから、それが叶つてとつても嬉しい。あの二人とフォース作っちゃえば？』

「フォースか……」

夜風を浴びるシヨウマの顔は、表情が読みづらかった。

『やっぱり、嫌なの？』

「いや、考えとく。ともかく、今日は疲れた。そろそろログアウトし……ん？」

立ち上がり、ログアウト操作に入ろうとしたシヨウマは、ふと背後に気配を感じて振り向いた。

木の向こうに一瞬だけ見えた、金色の髪。見覚えがあった。

「今の……ユーコ？」



翌朝。

自宅のベッドで眠っていたシヨウマは、枕元に置いた携帯電話の着信音で目を覚ました。

「誰だ……?」

寝ぼけ眼で画面を見ると、発信元は成瀬玲十郎―セレジユだった。通話ボタンを押し、耳に携帯を近づける。

「セレジユか? どうした、こんな朝っぱらに……」

『どうしたじゃありませんよっ!』

耳元で爆ぜたセレジユの声に、思わず携帯を顔から離してしまう。

「な、なんだよ。なにがあつたんだ?」

『GBジャーナルを見てください! とんでもないことになってます!』

「GBジャーナル? えっと……」

シヨウマはセレジユとの通話状態を維持したまま、ベッドから降りて机の上のパソコンを起動し、GBNの公式ホームページからGBジャーナルの記事一覧を開いた。

「な……っ!?」

次の瞬間、シヨウマは愕然とした。

「どういふことだよ、これ……っ!」

《有名ヘルパーシヨウマ、謎の少女ダイバーと夜の密会。これが噂の真実か》

記事の見出しの下に、一枚の写真が大きく掲載されている。

その写真の中で湖畔に立つシヨウマの隣には、少女の姿をした光があった。

第20話 光、追いかけて

家を飛び出し、病院へとバイクを走らせたシヨウマを駐車場の入り口で待ち構えていたのは、シヨウマと同様に険しい顔をした麻玖木であった。

「先生！ 大変なことに——」

「落ちついたまえ。状況は把握している。話は資料室でしよう」

声を発しようとしたシヨウマを止め、病院内の密談に使う資料室へと連れ込んだ麻玖木がドアの鍵をかけると、シヨウマは抑え込まれていた勢いのまま、声を張り上げた。

「なんなんですかあれは！ どうしてあんな写真が!!」

「わからない。私もこのような事態は想定外だ。よもや、彼女が姿形を持つて現れるとは」

椅子に座った麻玖木は、机に置いた携帯端末で例のGBジャーナルの記事を開き、掲載されている写真を拡大する。少女の形をした光に、短く息を吐く。

「やはり、間違いなく淡倉花梨だ。写真の角度からは確かに君と話しているようにも見えるが、実際はどうだったんだ？」

「いつも通りでした。クインスのディスプレイを開いて、二人で話して……。だけど、こ

んなものはいなかった！」

「だろうな。これが突発的に起きていたなら、こちらの彼女にもなんらかの影響があるはずだ」

「そうだ、カリンはっ？　大丈夫なんですか？」

「病院に着いてすぐに確認に向かったが、異常は見られなかった。後で君も会ってあげるといい」

シヨウマは無言で頷き、写真へと目線を送る。写真の中で寄り添う光に自分が気づいてなかったと思うと、胸がざわついた。

「シヨウマくん、気持ちちはわかるが我々には究明しなくてはならないことがある」

「誰がこの写真を……ですか」

「ああ。心当たりはあるか？」

「……あの時、ユーコがいたような気がしたんです」

病院に向かうまでの道中、ずっとあのログアウト前の光景が脳裏で再生されていたシヨウマは、絞り出すように言葉を紡いだ。

「君を取材していたG Bジャーナルの記者か。君のあとをつけていたのかもな。もうひとつの問題は、どうやってこんな写真を撮ったのかだ。加工したにしても抽象的過ぎる。もっとやりようがあるはずだ」

「あいつがカリンのことを知ってるとは思えませんし……」

「ならば、やはり撮ったのだろう」

「でも、どうやって？」

「考えられる可能性は、ひとつだけだな」

シヨウマはすぐにその答えを見出した。

「……ブレイクデカール」

「そうだ。ステージにも干渉するほどの力を持つブレイクデカールならば、こうしたことができるとしても不思議ではない」

「でも、ユーコは俺やセレジユと一緒に、キョウヤからブレイクデカールへの注意喚起を頼まれてたんですよ！」

「次代のチャンピオンからか……。だが人間とは、存外移ろいやすいものだ。危険性を知っているがゆえに、その絶大な力を欲する者もいる」

麻玖木の言葉は、厳しくとも否定できなかつた。

「こうなつたら、会社に直接乗り込んで、ユーコに確かめてきます！ 場所はここからそう離れてもいませんし、俺のバイクならすぐです！」

「スマートなやり方ではないが、今の君はそうでもしなければ気が収まらないか。いいだろう」

麻玖木は立ち上がり、白衣の襟を正す。

「私はこちらで淡倉花梨の経過を見ておく。何かあったら連絡しよう」

「お願いします。それじゃ……!」

挨拶もそこそこに、シヨウマは病院を飛び出してGBジャーナルを運営する出版社へと移動した。

だが、結果は振るわなかった。彼女は今日、会社を休んでいたのだ。

「休みつて、どういうことだよ……」

出版社のビルの傍に止めたバイクに横座りして、自販機で買った水を飲む。夏の足音が近づく日差しが容赦なく降り注いでいた。

「住所とか、携帯の番号とかの個人情報教えてはもらえなかったし、どうしたもんか……」

昨日の今日で、突然姿をくらませたとなれば、否が応でも疑念は膨らんでいく。

「何が見えていたのか、もつとよく聞きたいのに……」

携帯電話の画面に映した、カリンと思しき光の写真に指を添える。

「こんなに、近くにいたんだな。カリン……」

思い浮かぶのは、彼女との思い出。そして、あの日の、カリンがガンプラの中に宿った瞬間。

「……よしっ！ できること、やらないとな」

気合を入れるために自らの頬を張ってから、シヨウマは出版社を後にした。

結局、その日、シヨウマは一日GBNを監視していたが、ユーコがログインしてくることはなかった。

セレジユやキョウヤが止めに入ってきてくれるまで、記事を読んだ顔なじみや、以前の依頼主だったダイバーからの質問攻めや冷やかしに遭っていたこともあり、ログアウトしたころにはシヨウマも疲労困憊であった。

「結局空振りか……。明日また、ユーコがいるか聞きに行かないとな」

夜も更け、真つ暗な室内で大きく伸びをするシヨウマ。ふと、腹が鳴った。

「そういえば、昼からなんも食ってなかったな……」

近くのコンビニまで向かい、適当に弁当を買い、帰路につく。

「……ん？」

前方、街路灯に照らされているところに、ふらふらと揺れながら歩く女性がいた。酒に酔っているのか、なにやら唸っている。

「気楽なもんだな……」

思わずつぶやいてしまったが、聞こえている様子もない。歩く速度を上げて、シヨウマはその酔っ払い女性を追い越す。

ドサ、と人が倒れる音がした。振り返ると、その女性がうつ伏せに倒れていた。
「……………おいおい」

一度は苦笑で流そうと思ったが、どうにも気になってしまい、引き返した。

「おい、大丈夫か？ こんな往來で寝たら危ないよ。なあ、起きなつて」

肩をゆすると、シヨウマよりやや年上らしき女性は気だるそうに身じろぎし、半分だけ目を開けた。

「ん……………」

「うわ、酒くさ。とにかく、ちゃんと立つて」

「……………シヨウマ……………」

「え？」

思わず身体が強張る。確かにいま、その名前を口にした。

「な、なんで俺の名前を——」

問おうとした瞬間、女性は大粒の涙を流し、大声で泣き始めた。

「うわああん！ ごめんねえ！ 違うの！ 私じゃないのお！ 知らない間にあんなことになつててえ！」

「え、え、え、なにになになにつ？」

突然のことに混乱するシヨウマだが、即座にひとつの結論が思い浮かんだ。

「まさか……!」

よくよく見れば、面影がある。髪の毛の長さも色も違うが、髪型も類似していた。「お前、ユーコなのか!」

GBNで探していた人間を、現実世界で見つけてしまった。

第21話 掴め尻尾

「う、うーん……」

ぼんやりしていた視界が、徐々に定まる。

横になっていた身体を起こして、鈍い痛みのある頭で思考すると、ここが自宅でないことだけがわかった。

「(ハハ)……ど(ハハ)……う？」

「あ、ようやく起きたか」

扉の向こうから現れたのは、若い男。風呂上りなのか、濡れた髪をタオルで拭いている。

「具合はどうだ？　なんか飲むか？　って言っても、水ぐらいしかないけど」

そう言つて水が入ったコップを両手に持ち、こちらに近づいてくる。自分はもうソファで寝ていたようだ。

知らない男。知らない場所。着の身着のまま横になっていた自分。

みるみる、頭が冴えていく。

「き……」

「きゃー」

「きゃーっ！ 誘拐!! 拉致監禁!! 恐ろしい拷問!! けけ警察、警察……っ!」

悲鳴を上げ、携帯電話が入っている鞆に手を伸ばそうとしたが、手元がない。

「鞆はソファの横に置いてある。やつぱり覚えてないのか……」

コップを足の低いテーブルに置き、男はじっと見つめてくる。

「何もしてない。落ち着けて。ほら、よく見る。ずっと追っかけまわしてた顔だぞ?」

「追っかけまわす……?」

恐る恐る男の顔を見つめると、確かに見覚えがあつた。

「その顔、小生意気な言い方……! まさか、シヨウマなの?」

「ああ、そうだよ。ようやく見つけたぞ、ユーコ」

床に座ったシヨウマは、右手に持ったコップをユーコの前に置き、左手のコップの水は自らの口に運んだ。

「……、どこなの? どうして私こんなところに……」

「ここは俺の家。まあ、お世話になつてる人に住まわせてもらつてるんだけど。で、なんでお前がここにいたのかっていうと、酔つて道に倒れてたお前を、俺が連れてきたから」

「え、そ、そうなの? やだ、私つたらそんなに飲んでたのね……」

「ああ。おぶつてやった奴の肩越しに盛大に吐くくらいにはな」

「うそっ!!」

「おまけに玄関に着いたら着いたで、うわ言みたいに礼を言いながら俺に名刺渡してきやがるし。みやなみゆうじ宮波結子でユーコか。まんまだな」

そう言つてシヨウマはテーブルの端に放置していた名刺を一瞥する。

「ま、この際それはどうでもいい。俺はお前をずっと探してたんだ」

シヨウマの顔が真剣なものになり、ユーコは身構える。

「これはいったいどういうことなんだ?」

見せられたのは、シヨウマと光の少女を取り上げたGBジャーナルの記事だった。

「そ、それは……」

「さっき俺の顔を見た時、『違う』って言つてたな。何が違うんだ?」

ユーコは手前のコップの水を飲んで喉を潤してから、沈痛な面持ちで答えた。

「その記事は、私が書いたものじゃないわ。朝になって、急にアップされてたの」

「じゃあ、この写真もお前が撮つたわけじゃないのか? 俺はたしかにこの場所にいた

けど、お前っぽい人影もみんだ」

「あんたやセレジュくんと別れた後、すぐにログアウトして取材内容をまとめてたのよ。

あんたがそこにいたことすら知らなかったわ。ほら」

差し出されたダイバーギアを見ると、ユーコはシヨウマがカリンといた時間よりずつ

と前にログアウトしていた。

「なら、この記事は誰が書いたんだ？ 心当たりはないのかよ」

ユーコはいよいよ小さくなってふるふると首を振った。

「わかんないわよ。私以外にあんたを追ってたやつなんていないはずだし」

「なんか複雑な気分だな……。ともかく、俺としてはあの記事をさっさと消すなり閲覧不可にするなりしてほしいんだが」

「私だつてそうしたかった。でも、そこそこアクセス数もあるから消すことないって編集長が。それに私、あんまり下手なことできないし……」

「なんだそりゃ」

「社会人にはいろいろあるの。というか、なんでGBNにいるときと同じ口調なのよ」

「酔いつぶれてこんなガキに運ばれるような社会人、『お前』で十分だ」

「うう……」

と、ユーコの携帯に着信が入った。

「やばっ、編集長だ！ ちよつと出るね！」

シヨウマの言葉を待たず、ユーコは通話に入る

「も、もしもし！ い、いえ、大丈夫です！ はい、はい……えっ!!」

シヨウマを一度見て、再び電話に戻る。

「はい、はい……。わかり、ました。本人に掛け合ってみます。はい。失礼します……」
電話を切ったユーコは、蒼白な顔をシヨウマに向けた。

「なんだよ、どうした」

「あんたに、追加取材してこいつて。GBNの新規ユーザー獲得の後押しに、ヘルパーの存在をもっとアピールしたいって……。それから、写真の子についても」

思わずシヨウマは立ち上がりかける。

「お、おいおいおい……。ちよつと待てよ！ どうしてそうなる！」

「う、受けてくれたら、報酬としてGPいっぱいくれるそうよ？」

「そういう問題じゃない！ 俺はこの記事を——」

「待って！ これ、チャンスだわ！」

「ちや、チャンス？」

詰め寄ってきた顔に、シヨウマは目を白黒させた。

「GBNのプレイヤー数はうなぎのぼりよ。新規プレイヤー獲得のためなんて間違いない建前。GBジャーナルが本当に欲しいのは、あんたのゴシップだわ！」

「そ、それが？」

「わからないの!? 本格的にあんたの噂の正体を明かそうって魂胆なのよ！」

ユーコの言いたいことが理解できた。

「……この記事を書いたやつも動くってことか」

「そう！ だから、そいつの尻尾を掴むチャンスなの！ 協力して！」

「俺はどうすればいい？ お前のヘルパーをやればいいのか？」

「ううん。私じゃないわ。どうやら、こっちでセッティングをしてみたい」

ユーコが携帯を操作して、画面を見せる。そこには、GBNが二日後に開催する大規模イベントの詳細が表示されていた。

「ダブリン陣取り合戦……」

「あんたにはここで、こっちが用意するダイバーのヘルパーをしてもらおうわ！」